

仙台市文化財調査報告書第336集

も　　が　　さ　　き　　じ　　ょ　　う　　あ　　と
茂ヶ崎城跡

—第2次発掘調査報告書—

2009年1月

仙台市教育委員会

序 文

日頃より仙台市の文化財保護行政に対しまして、ご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

大年寺山には豊かな自然が残っており、仙台市野草園は市民のみなさまの憩いの場となっております。また、大年寺山周辺は、多くの文化財があるところとしても知られております。古くは古墳時代から、山裾の斜面に愛宕山・大年寺山・宗禪寺・茂ヶ崎・二ツ沢横穴墓群が造られております。中世には、栗野大膳の居城となった茂ヶ崎城が築かれたと伝えられ、その空堀や土橋や土塁の跡が残っております。江戸時代には仙台藩伊達家の靈廟が営まれ、その菩提寺であった大年寺がありました。現在は、靈廟と市指定文化財である大年寺懇門を見ることができます。

今回の発掘調査は、大年寺山公園整備に伴う工事のため実施いたしました。平成19年度の調査では、唐津焼の甕を用いた近世の墓が発見されており、近世の大年寺に関わる発見として貴重な資料となりました。

このような豊かな自然・歴史遺産は、わたしたち市民の財産であります。それを保護し、後世に受け継いでいくことは、大きな責務であると考えております。仙台市教育委員会では、文化財を保護するとともに、あらゆる場面での活用に取り組んでいく所存であります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書刊行に際しまして、ご協力とご助言くださいました多くの方々に深く感謝を申し上げます。

平成21年1月

仙台市教育委員会
教育長 荒井 崇

例　　言

1. 本書は宮城県仙台市太白区茂ヶ崎一丁目地内に所在し、大年寺山公園整備事業に先立って行われた茂ヶ崎城跡
第2次発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、平成19年度を1年次、平成20年度を2年次とした。

3. 発掘調査は仙台市教育委員会の指導のもと、大成エンジニアリング株式会社が行った。

4. 本書の執筆・編集は仙台市教育委員会荒井　格、大久保弥生、大成エンジニアリング株式会社調査員藤木　海、
宇井義典、調査補助員大川康裕が担当した。担当箇所は下記のとおりである。

第1章第1節－1 大久保　第3章第2節 大川 第4章－1・2・5 藤木

第1章第1節－2・3・第2節、第2章、第3章第1節・第3節、第4章－2～4 宇井

5. 本書に係る遺物・写真・実測図版等の資料については、仙台市教育委員会が保管している。

6. 本調査の実施と本報告書を執筆するにあたり、次の諸氏・機関よりご指導、ご教示、ご協力を賜った。記して
謝意を表す次第である（敬称略順不同）。

坂上和弘（国立科学博物館）修邦智常（両足山大年寺）惟村忠志（有限会社ティーケイリサーチ）

7. 陶磁器に関する産地及び年代等の鑑定は、仙台市教育委員会文化財課仙台城史跡調査室 佐藤　洋が行った。

8. 1年次発掘調査業参加者 安保美智子 井上伊登奈 小野田房司 柏倉幸三 黒川玉枝 斎 義勝 佐々春子
佐藤和彦 佐藤益弘 佐藤宗幸 霜山直良 高橋信夫 早坂　誠 星砂斗子 芳野一幸 三浦陽子 井口　晋
菅原大輔 黒川勝実 青木秀美

1年次整理作業参加者 青池紀子 柳田美須徳 中村君江 清水さくら 松田英明 佐野康一 白井順子
大久保ひとみ 二瓶　稔

2年次発掘調査参加者 田中重雄 高橋英幸 野又文博 柏倉幸三 佐藤七郎 沼田文彦 目黒道夫
丸子真太朗 八鍬　亨 高田哲夫 小澤褒藏 石橋仙秋 山口順子 宇多武夫 綿貫健次郎 黒川玉枝
黒川勝実 工藤舞衣

2年次整理作業参加者 牧野麻子 佐藤謙介 斎藤　仁 中村君江 白井順子 富田静香

凡　　例

1. 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1967）に準拠している。

2. 断面図・平面図の標高値は、海拔高度（T.P.）を示している。

3. 報告書で使用した地図は下記のとおりである。

第1図 仙台市都市計画基本図（S=1/2,500）「50-4」「51-3」

第2図 国土地理院地形図（S=1/25,000）「仙台西南部」平成15年3月1日発行

「仙台東南部」平成19年3月18日発行

第3図 大年寺山公園修正設計全体計画図

第4図 大年寺山公園修正設計全体計画図等を用いて作製。

第34図「安政補正改革仙府絵図」（部分）に調査区の推定位置を図示。

4. 報告書で用いている公共座標は、日本測地系 平面直角座標第X系に基づく。

5. 報告書に掲載した遺構図などは、真北を上に配置したが、それ以外の図には方位を表示した。

6. 報告書で使用した縮尺は下記のとおりである。

遺構 1/30、1/60、1/120、1/400、1/1,500 遺物 1/1、1/2、1/3、1/4、1/6

7. 報告書で使用した遺構の略号は次のとおりである。 SK：土坑、SD：溝状遺構、P：ピット

8. 報告書で遺構および遺物の計測値に用いた（ ）は残存値を表す。

目 次

序 文	
例 言	i
凡 例	i
目 次	iii
第1章 はじめに	1
第1節 検査の概要	1
1. 検査に至る経緯	1
2. 検査要項	1
3. 検査の経過と検査方法	1
第2節 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡周辺の地形	3
2. 周辺の遺跡	3
3. 遺跡の概要とこれまでの検査	4
4. 基本層序	7
第2章 1年次 検出された遺構と遺物	11
第1節 検出遺構と出土遺物	11
第2節 遺構外出土遺物	23
第3節 窪棺内出土人骨	32
第3章 2年次 検出された遺構と遺物	33
第1節 検出遺構	33
第2節 遺構外出土遺物	42
第4章 まとめ	50
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図 周辺の遺跡	5	第 15 図 8 ドレンチ	22
第 2 図 周辺の地形及び検査対象範囲	6	第 16 図 9・10・11 ドレンチ	24
第 3 図 1年次基本層序	8	第 17 図 土壌全体図	26
第 4 図 2年次基本層序	8	第 18 図 遺構外出土遺物（1）	28
第 5 図 1年次ドレンチ配置図	9	第 19 図 遺構外出土遺物（2）	29
第 6 図 2年次ドレンチ配置図	10	第 20 図 遺構外出土遺物（3）	30
第 7 図 1 ドレンチ	13	第 21 図 遺構外出土遺物（4）	31
第 8 図 2 ドレンチ	14	第 22 図 1 ドレンチ	34
第 9 図 2 ドレンチ SK 2 出土遺物	15	第 23 図 2・1・2・3・4 ドレンチ	37・38
第 10 図 3 ドレンチ	16	第 24 図 2・5・6 ドレンチ	39
第 11 図 4 ドレンチ	18	第 25 図 3・1 ドレンチ	40
第 12 図 5 ドレンチ	19	第 26 図 3・2 ドレンチ	41
第 13 図 6 ドレンチ	20	第 27 図 4・1・2 ドレンチ	42
第 14 図 7 ドレンチ	21	第 28 図 遺構外出土遺物（1）	44

第 29 図 遺構外出土遺物（2）	45	第 32 図 遺構外出土遺物（5）	48
第 30 図 遺構外出土遺物（3）	46	第 33 図 安政補正改革仙府絵図	54
第 31 図 遺構外出土遺物（4）	47		

表目次

表 1 2 年次陶磁器集計表	49	表 3 2 年次瓦集計表	52
表 2 1 年次瓦集計表	51		

写真図版目次

写真図版 1 (1 年次調査) 遺跡全景、1・2 トレンチ	59
写真図版 2 (1 年次調査) 2～6 トレンチ	60
写真図版 3 (1 年次調査) 7～10 トレンチ	61
写真図版 4 (1 年次調査) 10・11 トレンチ、調査区遠景、作業風景等	62
写真図版 5 (1 年次調査) 2 トレンチ SK 2 出土遺物、小形木製品	63
写真図版 6 (1 年次調査) 遺構外出土遺物 1～15	64
写真図版 7 (1 年次調査) 遺構外出土遺物 16～24	65
写真図版 8 (1 年次調査) 遺構外出土遺物 25・26、2 トレンチ SK 2 妻棺出土人骨	66
写真図版 9 (2 年次調査) 立会い調査、1～2-1 トレンチ	67
写真図版 10 (2 年次調査) 2-1～2-5 トレンチ	68
写真図版 11 (2 年次調査) 2-6～4-2 トレンチ	69
写真図版 12 (2 年次調査) 遺構外出土遺物 1～16	70
写真図版 13 (2 年次調査) 遺構外出土遺物 17～25	71

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、仙台市太白区茂ヶ崎一丁目に計画された大年寺山公園整備事業に伴う調査である。仙台市建設局百年の社推進部公園課では、大年寺山公園整備を平成19年度から進め、平成20年度の完成を目指している。

平成19年9月28日付けで、仙台市長梅原克彦により大年寺山公園整備工事に伴う発掘通知が提出された。整備地内は、茂ヶ崎城跡の範囲内であることから、仙台市教育委員会との協議が持たれた。その結果、整備工事の進捗に合せて段階的に調査を実施するに至った。調査は2ヵ年計画のもと、平成19年度を第1次調査の1年次、平成20年度を2年次として実施した。整備範囲は約8,900m²と広範囲に及ぶことから、1・2年次とも工事によって掘削する範囲にトレーンチ設定し確認調査を行った。結果、遺構・遺物の検出が非常に希薄であり、工事掘削で破壊される部分が少ないことが確認されたため、確認調査を行わなかった範囲については盛土などによって下層に影響のない部分を除いて本発掘調査を実施することとした。

調査は、仙台市教育委員会文化財課の指導のもと、大成エンジニアリング株式会社（代表取締役 古川 健）が行つた。調査1年次目は、公園駐車場と伊達家墓所に通じる道路を対象に11ヶ所のトレーンチを設定し、平成19年11月6日から開始した。2年次目は、公園広場、野草園との連絡園路、大年寺山門に通じる階段部を対象に、11ヶ所のトレーンチを設定し、平成20年7月2日から実施した。

2. 調査要項

遺跡名	茂ヶ崎城跡（宮城県遺跡番号01119）	
所在地	仙台市太白区茂ヶ崎一丁目地内	
調査原因	大年寺山公園整備事業に伴う発掘調査	
調査面積	1年次：310m ²	2年次：209m ²
調査期間	1年次：平成19年11月6日～12月26日	2年次：平成20年7月2日～9月5日
調査主体	仙台市教育委員会	
調査担当	1年次 担当職員	主瀬光朗（仙台市教育委員会文化財課主査）
	調査員	藤木 海（大成エンジニアリング株式会社）
	調査補助員	宇井義典（大成エンジニアリング株式会社）
	計測員	狩野 稔（大成エンジニアリング株式会社）
	計測補助員	浅見克己（大成エンジニアリング株式会社）
2年次	担当職員	荒井 格（仙台市教育委員会文化財課主査）
	担当職員	大久保弥生（仙台市教育委員会文化財課主査）
	調査員	宇井義典（大成エンジニアリング株式会社）
	調査補助員	大川康裕（大成エンジニアリング株式会社）
	計測員	狩野 稔（大成エンジニアリング株式会社）

3. 調査の経過と調査方法

平成19年度（1年次調査）

平成19年度は、墓地に通じる道路に8ヶ所、駐車場に3ヶ所の合計11ヶ所のトレーンチを設けた（第5図）。調査面積は310m²である。発掘調査は、道路部分の北東側から着手し、南西側の駐車場に向かって進めた。

表土から遺構確認面まではバックホウ（0.3 m³）を用い、遺構の検出及び掘り込み作業は人力によっておこなった。また、各トレンチには、2～3ヶ所の深掘区を設定し、下層の状況を確認した。

11月6、7日に調査範囲の設定及びガードフェンスの設置などの環境整備をおこない、周囲への安全確保、発掘調査への準備を整えた。11月8日から調査を開始し、調査工程、安全管理の面からトレンチ3ヶ所をガードフェンスで囲い、並行して調査を進めるように段取りをおこなった。

調査の進行に伴い、トレンチの土層断面図を作製し、調査区周辺の地形を復元できるデータを記録した。トレンチ配置図や平面図はトータルステーションを使用し、デジタル実測を実施した。また各トレンチでの完掘状況及び断面写真を適宜撮影し、記録した。

調査を進めていく中で、2トレンチから甕棺墓が検出され、検出状況の微細図を作製した。駐車場内の9～11トレンチでは、工事掘削深度が造成層・搅乱層内にとどまったが、それぞれのトレンチにおいて下層の状況を確認するための深掘区を設けた。なお、駐車場を取り囲むように土塁が巡っており、茂ヶ崎城あるいは大年寺に関係する遺構である可能性も考えられることから、25cm単位の等高線図を作製した。

12月21日に発掘調査を終了し、翌週に現場事務所などを撤収した。

平成20年度（2年次調査）

平成20年度は、宮城テレビ放送送信所裏の公園広場、野草園に到る連絡園路及び公園から山門へ到る階段部の整備範囲について調査をおこなった。調査対象範囲が広範囲に亘るため、公園広場の北西側を1区、その南東側を2区、野草園に到る連絡園路を3区、山門にいたる階段部を4区として分けた。そして、1区に1ヶ所、2区に6ヶ所、3区に2ヶ所、4区に2ヶ所の合計11ヶ所のトレンチを設定した（第6図）。調査面積は209m²である。

1・2区は、公園整備の計画図面に基づいて掘削工事がおこなわれる範囲を対象とした。また、3区と4区については、公園整備計画図面に基づきトレンチの位置を示し、調査を実施した。調査順序は、工事工程の都合により、公園広場部の2区から着手し、次に道路側の1区へ移行していく、3区、4区と進めた。

バックホウ（0.25m³）で表土掘削をおこない、遺構確認面に到り人力により遺構の検出と掘り込み作業をおこなった。また、地形の形成と下層の文化層の有無を確認するため、トレンチ内に深掘区（2m×1m）を設定した箇所がある。

7月4日に、本調査の実施に先立って、2区の北側斜面の縁辺部5ヶ所と、送信所近くの墓所近辺3ヶ所の立会い調査をおこなった。いずれの箇所も、公園整備計画図面に基づく工事箇所についてバックホウを用いて表土掘削をおこなった。

北東斜面側は、工事掘削深度が、造成層・搅乱層内にとどまったため、本調査をせずに工事を進めていくこととした。送信所裏では、遺構検出の可能性がある土層が確認されたため、本調査を実施することとした。

7月8日に現場事務所を設置し、安全対策として單管ガードによる周囲の環境整備をおこない、発掘調査への準備を整えた。7月10日から調査を開始した。調査の進行に伴い、各トレンチで土層断面図を作製し、調査区周辺の地形を復元できるデータを記録した。トレンチ配置図や平面図はトータルステーションによるデジタル実測を実施した。また、完掘状況及び断面写真を適宜撮影し記録した。

調査終了後、1区は排土で埋め戻して現状を復旧した。2区は、連続的に工事へと移行することから、調査後の埋め戻しをおこなわずに調査を終了した。3・4区では、排土が水分を含んでいたため、調査終了後に碎石を敷き均し、通行に不便がないよう復旧に努めた。

9月2日に発掘調査を終了し、9月5日に現場事務所の撤収と碎石敷き均しをおこない、仙台市建設局百年の杜推進部公園課と仙台市教育委員会の立会いの上、発掘調査を完了した。

第2節 遺跡の立地と環境

1. 遺跡周辺の地形

仙台市は宮城県の中央やや南側に位置し、西は東北地方を南北に縦貫する奥羽山脈で山形県と接しており、東は太平洋に面している。このように市域が宮城県を東西に横断して広がっているため、東側と西側とでは地理的環境が大きく異なっており、地形的には西側から山地、丘陵、低地に大別される。

市内を東流する河川はいずれも奥羽山脈の山々を源流としており、北を流れる七北田川は泉ヶ岳を、中央を流れ名取川に合流する広瀬川は面白山を、南を流れる名取川は大東岳をそれぞれ源流とする。

山地の東側には、並行して幅 10 ~ 30 km でなだらかな丘陵地帯が分布しており、七北田川と広瀬川の間は七北田丘陵、広瀬川と名取川の間の東側は青葉山丘陵と呼ばれている。標高は概ね 50 ~ 500 m であり、新第三紀鮮新世の泥岩、凝灰岩を基盤としている。

低地は、仙台平野の西縁を北東 - 南西方向に約 35 km の長さで延びている長町 - 利府線と呼ばれる構造線を境として西側の台地と東に広がる沖積平野に二分される。また、長町 - 利府線の西側に沿って幅 1 km 弱、長さ約 10 km の隆起帶が認められ、段丘面が断層を伴って変形したものと考えられている。

台地は広瀬川両岸に展開しており、左岸では台原段丘面、仙台上町段丘面、仙台中町段丘面、仙台下町段丘面の 4 つに区分され、標高は 20 ~ 200 m である。右岸には台原段丘面よりも古い青葉山段丘面（青葉山 I ~ IV 面）が広がっており、太白山の北東方向に肩頂を持ち、南西から北東方向にかけて、順に新しい面を形成している。遺跡の立地する大年寺山は青葉山段丘面の中で最も新しい青葉山 IV 面に位置づけられる。

大年寺山は北東方向に舌状に張り出した地形となっており、中世の茂ヶ崎城や近世の大年寺はその張り出した丘陵頂部の平坦面に立地している。平坦面の北側と南東側は急峻で、低地との比高差は 75 ~ 80 m である。

2. 周辺の遺跡（第 1 図）

仙台市に登録されている遺跡の数は、平成 20 年現在で 770 ケ所を超える。当遺跡が所在する大年寺山の周辺およびその南方に広がる郡山低地には、各時代の遺跡が分布している。ここでは茂ヶ崎城跡周辺の代表的な遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡は、大年寺山の南方 1.5 km に富沢遺跡（14）がある。小学校建設に伴う調査の折に、地下 3 m から約 2 万年前の生活の痕跡と当時の環境を伝える自然遺物が発見され、当時の人の生活と環境の一端を復元できる貴重な遺跡といえる。

繩文時代には、大年寺山の北西約 0.5 km の丘陵上に、八木山緑町遺跡（9）が所在する。また、名取川支流の荒川両岸には、六反田遺跡（13）、伊古田遺跡（12）、大野田遺跡（14）、下ノ内遺跡（11）などの遺跡が連なっている。六反田遺跡では中期中葉の住居跡が検出され、大野田遺跡では、後期前半の土偶 270 点以上や鹿角製の漁労具などが出土した。郡山遺跡（16）では後期中頃から後半、晚期後半の遺構や遺物が検出されている。

弥生時代の遺跡には、南小泉遺跡、郡山遺跡、富沢遺跡、西台畠遺跡、下ノ内浦遺跡、山口遺跡、下ノ内遺跡などがある。広瀬川右岸には中期中頃以前の水田跡が検出された郡山遺跡が位置している。仙台平野で最も古いとされる弥生土器が出土しており、宮城県北部の前期青木畠式土器と共通する特徴を持っている。また、富沢遺跡では、中期（楕円形壠式・十三塚式期）の水田跡が検出され、大畦畔と小畦畔により区画されており、一区画は 5 ~ 30 m² ほどであることが明らかとなった。遺物は石斧丁や木製品が出土している。

古墳時代中期中頃から後半には、兜塚古墳、裏町古墳、一塚古墳、二塚古墳、大野田古墳群、春日社古墳、鳥居塚古墳などの高塚古墳が築かれる。大年寺山東端の裾部にある兜塚古墳（8）は、5 世紀後半の帆立貝形の古墳であり、埴輪を有し埴丘が残存する古墳として貴重なものである。大年寺山の周囲には、大年寺山横穴墓群（3）、愛宕山横

穴墓群(5)(6)、宗禅寺横穴墓群(4)、茂ヶ崎横穴墓群(2)、二ツ沢横穴墓群(7)が造られている。造営の年代は大年寺山横穴墓群が6世紀末頃であり、愛宕山、宗禅寺、茂ヶ崎、二ツ沢の4ヶ所は7世紀後半から8世紀前半に集中する。

古代の遺跡には、広瀬川と名取川にはさまれた自然堤防上に、多賀城以前の隆奥国府である郡山遺跡がある。発掘調査により、官衙群や寺院が造営されたことが明らかになっており、官衙は、7世紀中頃にⅠ期官衙が造営され、7世紀末頃にⅡ期官衙へ変遷し8世紀中頃まで機能していたと考えられる。

中世の遺跡には、名取川北岸に王ノ壇遺跡(15)がある。王ノ壇遺跡では、鎌倉時代頃の武士層の屋敷跡が確認されており、その屋敷内には、多くの建物跡や井戸跡が検出された。そして、丘陵上と沖積平野に多くの城館が残っている。大年寺山には名取郡北方三十三郷之旗頭であった栗野大膳が茂ヶ崎城(1)を築き、その後、栗野大膳亮忠重の代になり、沖積平野の北目城(17)に居を移したとされている。

近世には、寛永5年(1628)に伊達政宗の居城である若林城(18)が築かれ、現在の宮城刑務所に位置する。政宗は、寛永13年(1636)に亡くなるまでの晩年をこの城で過ごしている。南小泉遺跡では、発掘調査によって江戸時代初期の遺構が検出され、若林城周辺の町割の様相が明らかにされつつある。

3. 遺跡の概要とこれまでの調査

茂ヶ崎城跡は、JR仙台駅の南方約3kmの大年寺山あるいは茂ヶ崎と称される丘陵上に所在する(第1図)。大年寺山の名称は、元禄10年(1697)開基の仙台藩伊達家の菩提寺である黄檗宗大年寺に由来する。大年寺山の丘陵最頂部には仙台放送の敷地があり、その北東側にNHK大年寺テレビ放送局がある。丘陵北西側には仙台市野草園、南側には東北工業大学二ツ沢キャンパス、東側には茂ヶ崎团地がある。

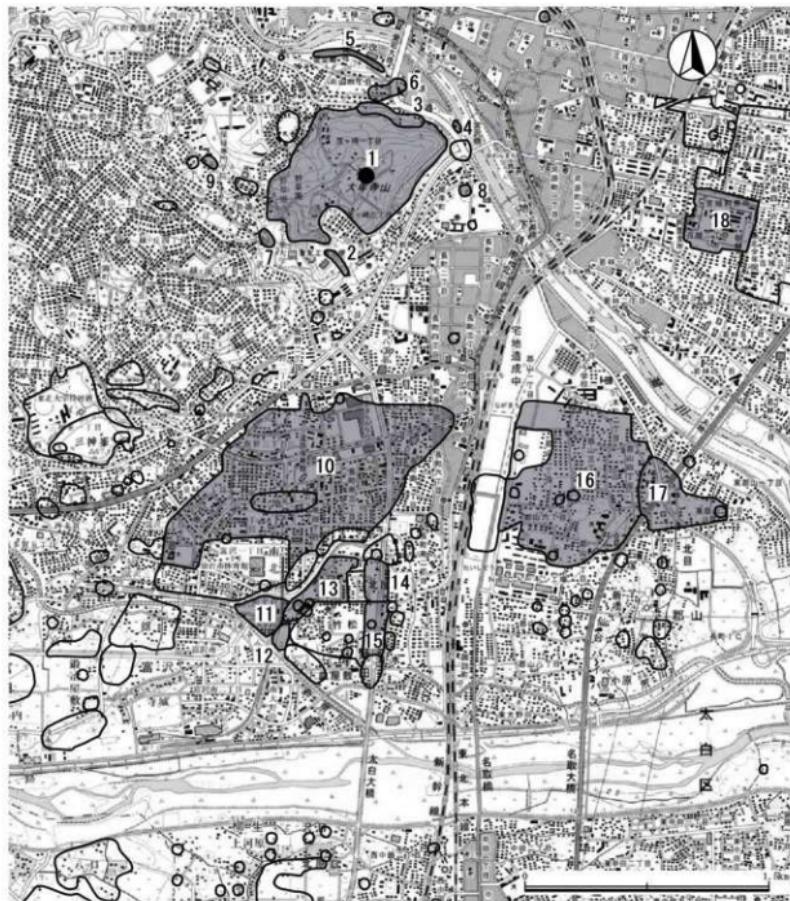
茂ヶ崎城は、戦国時代に名取郡北方地域の領主としてこの地を治めていた栗野大膳が住んだ城館とされる。『古城書上』によれば、応永年間(1394~1427)に、東西86間、南北61間で、本丸と二の丸の間が280間で山続きの平地とされ、二の丸は東西38間(83間とする写本もあり)、南北40間と記されている。しかし、後世の地形改变が著しく、茂ヶ崎城の範囲の詳細は不明である。

これまでに茂ヶ崎城跡の遺構の状況を明確にした調査や研究はないが、大年寺山のなかで最も標高の高い仙台放送敷地の南側と、その北東側(NHK大年寺テレビ放送局との境)の2ヶ所に空堀と思われる遺構が確認されている。これらの空堀で区画された範囲が茂ヶ崎城の主郭(本丸)であると考えられている。このほかに、南側の空堀中央に土橋状遺構、北東側の空堀の外側に土壘状遺構、仙台放送敷地西側の急斜面上に二段にわたるテラス状の地形が確認される。また、現在「ロータリーの丘」と称する公園に南と東で接する道路は直角に折れ曲がっており、当時の堀を拡張あるいは掘り下げて道路とした可能性がある(仙台市史編さん委員会 2006)。

近世には、仙台藩第四代藩主伊達綱村が茂ヶ崎の地に鐵牛道機を招き、黄檗宗大年寺を開いた。開山は元禄10年(1697)のことであり、以降伊達家の菩提寺として繁栄していったが、明治時代になると衰退し伽藍のほとんどが失われていった。現在は近世の大年寺惣門がその姿をとどめている。そこから石段を登ると「千人溜」と称される平場に達し、その奥の寺域の中心には土壘が方形に巡っている様子がうかがえる。

茂ヶ崎城跡の発掘調査は、平成19年度に野草園の擁壁設置工事に伴って実施されている。調査では、19世紀中頃の甕棺墓が発見された。棺として用いられていたのは、江戸時代末頃の施釉された堀焼の大甕で、それを木箱に入れ丁寧に埋葬された状況が確認された。このような埋葬形態は、仙台市域では新妻家墓地の例に留まっていたため、当時期の葬制を示す貴重な例となった。(仙台市教育委員会 2008)。

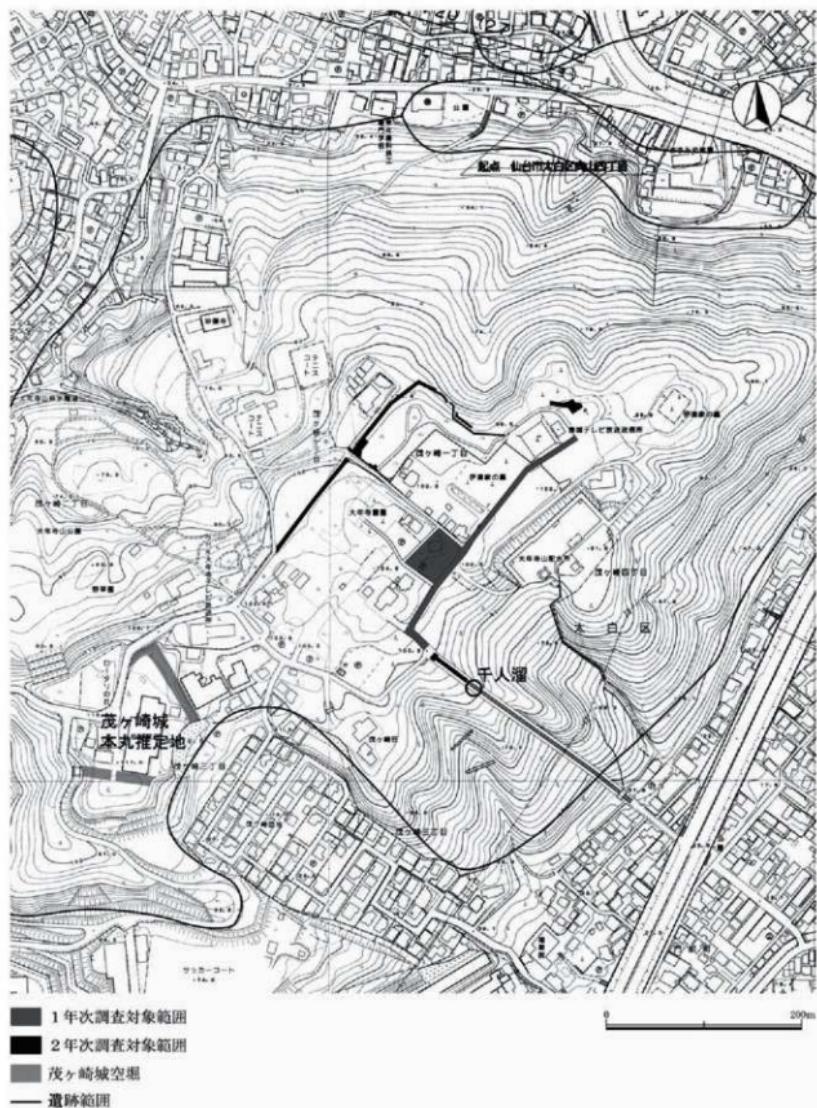
平成19年度の野草園の擁壁設置工事に伴う調査を第1次調査とし、平成19~20年度にかけて実施された本調査を第2次調査として報告する。



%	遺跡名	種別	立地	年代
1	茂ヶ崎城跡	城郭	丘陵頂部	中世
2	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳(末期)・奈良
3	大年寺山横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳(後期)
4	宗源寺横穴墓群	横穴墓群	段丘	古墳(後期)
5	愛宕山横穴墓群A地点	横穴墓群	丘陵斜面	古墳(後期)
6	愛宕山横穴墓群B+C地点	横穴墓群	丘陵斜面	古墳(後期)
7	二ツ沢横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳
8	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳(中期)
9	八木山経町遺跡	散居地	丘陵	縄文・部員・平安

%	遺跡名	種別	立地	年代
10	富沢遺跡	集落跡・水田・兼用地	坂背湿地	旧石器～近世
11	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文(中～後期)・奈良・古墳・奈良・平安・中世
12	伊吉田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文(後期)・古墳～平安
13	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～近世
14	大野田遺跡	祭祀道路・集落	自然堤防	縄文(後期)・奈良・平安・古墳・奈良・平安
15	王ノ堀遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文(後期)～中世
16	郡山遺跡	宮殿・寺院・兼用地	自然堤防	古墳(末期)～平安
17	北日城跡	集落跡・水田	自然堤防	縄文～近世
18	若林城跡	城郭・古墳・施設	自然堤防	古墳・平安・中世・近世

第1図 周辺の遺跡 (S=1/30,000)



第2図 周辺の地形及び調査対象範囲 (S=1/5,000)

4. 基本層序（第3・4図）

平成19年度（1年次）の発掘調査対象範囲は、北東方向に舌状に張り出す大年寺山の地形の軸とほぼ重なってしたことから、北東から南西方向の地形と層の堆積状況を確認できる可能性が考えられたため、各トレンチで3箇所前後の深掘調査を実施した。各トレンチ断面の検討を行った結果、飛石状ではあるが台地上を縱断する層序対比図を作製することができた（第5図）。

深掘調査によって確認された基本層はI～V層であるが、各トレンチの土層注記において、同一層としたものについて色調が多少異なるが、おおむね次のような傾向が見られる。I層は暗黄褐色粘土層、II層は黄褐色砂質粘土層、III層は暗黄褐色砂質粘土層、IV層は褐色シルト層、V層は礫層である。II層とIII層はともに石英粒と凝灰岩小礫を含んでいるが、色調の違いから分層を行っている。なお、細別層については各トレンチ内での細分であり、トレンチ間で対応を試みてはいるが、必ずしも同一の層ではない。

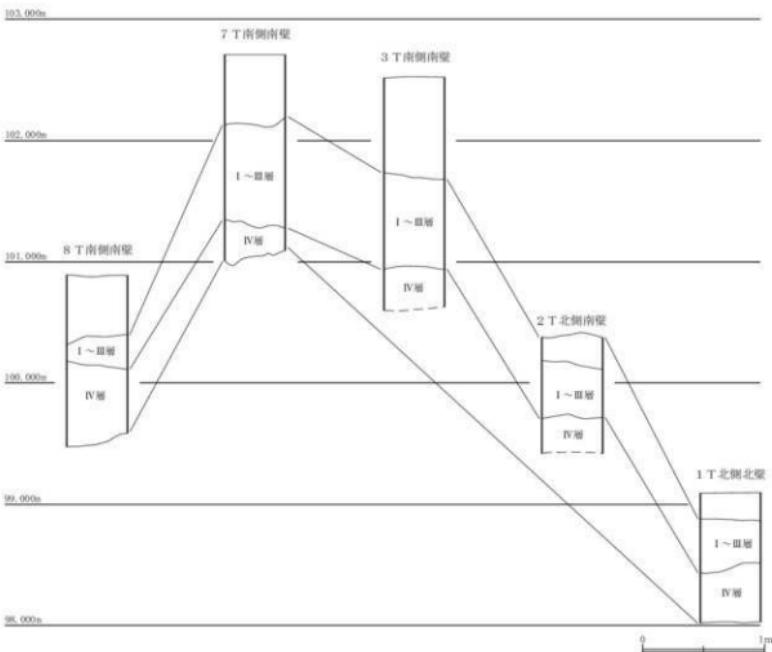
平成20年度（2年次）の調査は、丘陵の斜面部分に位置する調査地点が多く、基本層を確認できるトレンチは少なかった。斜面という不安定な堆積環境に起因するものと推定される。

ここで今回の調査で確認された基本層を、大年寺山周辺地域の地質に位置付けておきたい。

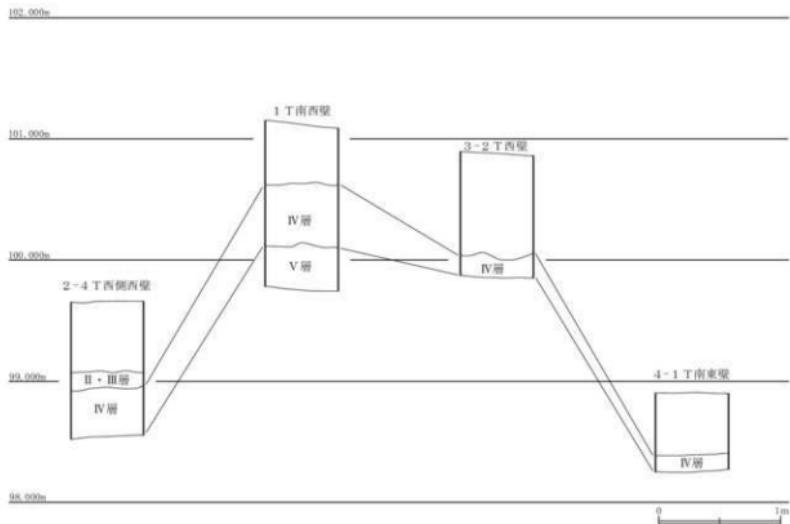
茂ヶ崎大年寺山一帯には大年寺層が広がっており、その上には上位の越路火山灰部層と下位の二ツ沢礫層部層に細分される青葉山層が認められる。青葉山層のさらに上位には愛島火山灰があり、その上位に水野火山灰が堆積している。二ツ沢礫層部層は弱固結円礫層で、上部の基質は火山灰質粘土である。越路火山灰部層は暗褐色粘土質火山灰であるが、暗青色砂状火山灰の集中するところもみられる。下部は赤色土化し、粘土化が著しい。愛島火山灰は宮城県川崎町安達付近を噴出源とする6～8万年前のテフラであり、石英粒、砂鉄粒を多く含み、緑色凝灰岩や花崗岩の岩片を含んでいる。水野火山灰の下部には、約3万年前に藏王から噴出した特徴的な川崎スコリアがみられるが、部分的に薄失する場合もある。

基本層のII層とIII層は色調の違いによって分層を行ったが、石英粒と凝灰岩の小礫を含んでおり、愛島火山灰の特徴と類似している。V層は礫層であることから二ツ沢礫層部層に対比されるものと考えられる。今回の調査では川崎スコリアは確認されなかつたが、本来堆積していなかつたものか、後世の削平により失われたものが不明である。したがってI層が水野火山灰か愛島火山灰か判然としない。

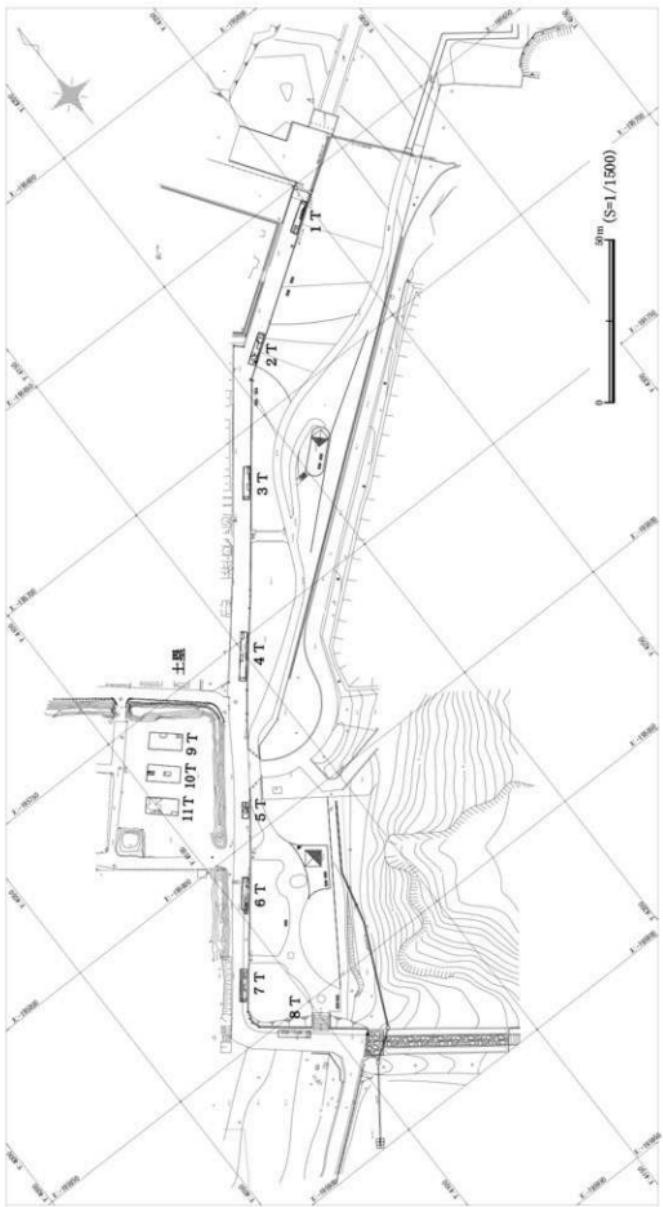
以上の状況から基本層II層、III層は愛島火山灰、V層は二ツ沢礫層部層に対比され、IV層は越路火山灰部層に相当する可能性がある。



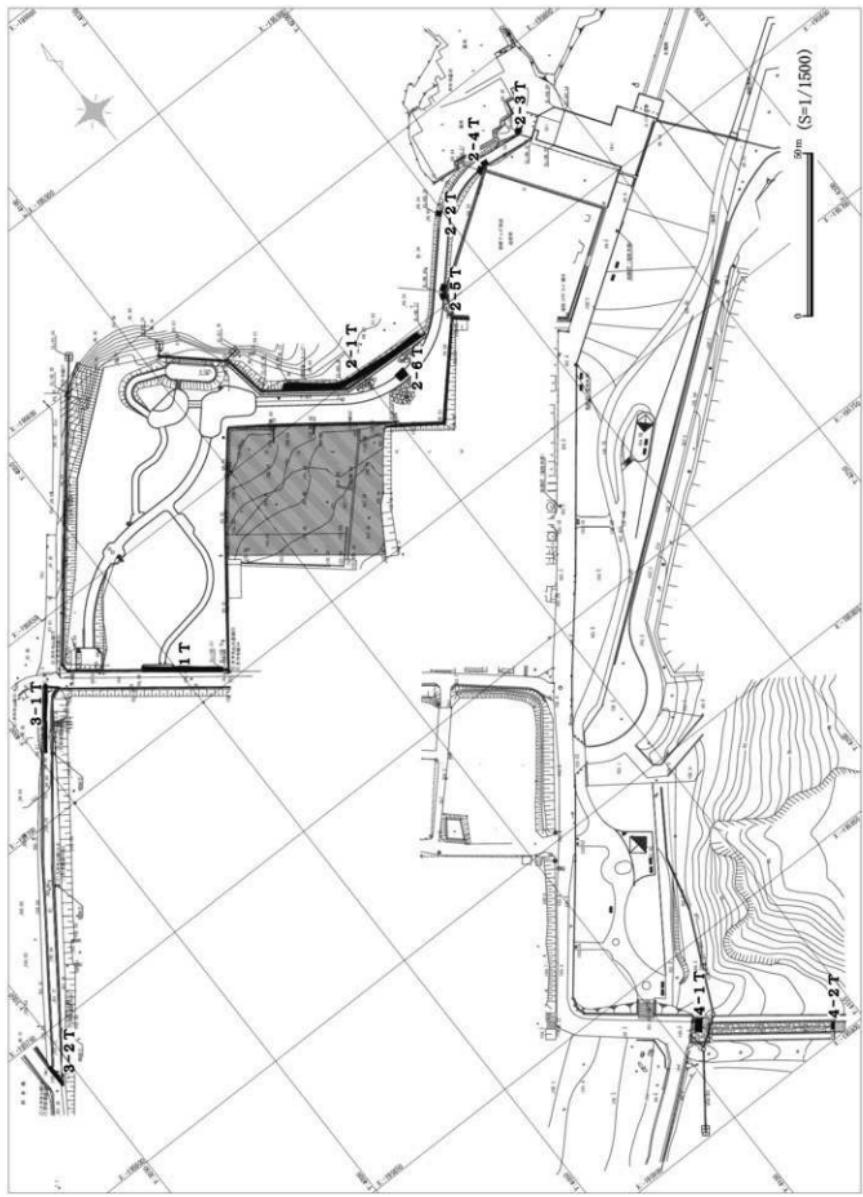
第3図 1年次基本層序 ($S=1/40$)



第4図 2年次基本層序 ($S=1/40$)



第5図 1年次トレンチ配置図 (S=1/1,500)



第6図 2年次トレンチ配置図

第2章 1年次 検出された遺構と遺物

第1節 検出遺構と出土遺物

1 トレンチ（第7図）

道路部分の北東側の端に、 $10\text{ m} \times 2\text{ m}$ のトレンチを設定した。標高は調査区内でも最も低く、約 99.1 m である。厚さ 20 ~ 30 cm の造成層が全体を覆っており、瓦片、縄文土器片などの遺物が混入していた。

遺構は SD 1 構造遺構、SK 1 土坑の 2 基が検出されている。新旧関係は、SK 1 が SD 1 を掘り込んでいる。土層観察の 1 ~ 5 層は SK 1 の堆積土に、6 ~ 9 層は SD 1 の堆積土にそれぞれ対応している。

SD 1 のプランは南東側に「コ」の字状に掘り込まれた、長さ 306 cm・幅 47 cm・深さ 10 cm であり、断面図上では 24 cm の掘り込みが認められる。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土の色調は褐色であった。SK 1 のプランは長軸 (67) cm・短軸 74 cm・深さ 28 cm の不整形を呈し、同じく断面図上では 44 cm の掘り込みが認められる。北側の一部がテラス状に張り出している。

トレンチ内の 3ヶ所に下層確認トレンチ設定し、遺構確認面から 65 cm の深さまで掘削した。I 層は 10 ~ 15 cm、II 層は 15 ~ 30 cm、III 層は 10 ~ 15 cm、IV 層は 35 ~ 50 cm の層厚があり、IV 層底面では段丘礫層が検出された。3ヶ所とも段丘礫層を検出している。

2 トレンチ（第8図）

丘陵上の平坦面から斜面へと変わる傾斜変換点に、 $10\text{ m} \times 2\text{ m}$ のトレンチを設定した。標高は最高 101.7 m、最低 100.6 m、高低差は 1.1 m を測り、調査区内で最も高低差のあるトレンチである。

厚さ約 15 cm の造成層が全体を覆っており、特にトレンチの両端（北側・南側）では大きく擾乱を受けている。造成層及び擾乱のなかに瓦片など混入していた。

トレンチの南西側で SK 2 土坑が検出された。掘削を進めていくと甕の一部が検出されたため、南東側に拡張したがプラン全体を検出するには至らなかった。後世の掘削により遺構の南側が擾乱されていたため、甕の一部は損なわれていた。

甕の中の堆積土を除去すると、底面付近から人骨が出土した。その出土状況から、後世の掘削による擾乱の影響は受けではないと思われる。人骨の遺存状況は比較的良好ではあるが、四肢骨、寛骨、頭骨などの丈夫な骨以外は脆くなっていた。副葬品として、寛永通寶 3 枚、数珠玉 2 個が確認された。甕棺として用いられた大甕は 17 世紀後半の唐津焼である。

SK 2 の掘り込みのプランは隅丸方形を呈し、長軸 107 cm・短軸 (83) cm・深さ 172 cm を測る。底面近くでテラス状の平坦部分があり、さらに甕を安定させるために一段深く約 15 cm 掘り込んでいる。

トレンチ内に 2ヶ所の下層確認トレンチを設定し、遺構確認面から約 100 cm の深さまで掘削した。I 層は 5 ~ 35 cm、II 層は 30 cm、III 層は 25 ~ 30 cm の層厚がある。IV 層は段丘礫層上面まで確認していないため、本来の層厚は分からない。北側のトレンチで層厚 45 cm 以上を掘削したが、礫層は検出できなかった。

SK 2 土坑出土遺物（第9図）

1 是唐津焼の大甕である。外面・内面とも全体に釉がかけられている。内面の調整はタタキが行われた後に横方向のヘラナデを施して当て具痕を消しているが、部分的に当て具痕が残っている箇所がある。当て具痕は格子目状を呈す。外面には突帯が一条廻っている。頸部はやや外反し、口縁部は内側に折り返されている。

当て具は 17 世紀前半の資料では同心円状を呈することが多いが、出土資料では格子目状を呈していることから、それより後出の 17 世紀後半以降に位置づけられる。また、口縁部を内面側に折り返す形状が顕著に認められるため、18 世紀以前である可能性が高い。以上の製作、形態などの特徴から、大甕の年代は 17 世紀後半に位置づけられる。

2・3は副葬された数珠玉である。2点とも黄色の琥珀を素材としていると思われる。2点とも孔は垂直に開けられており、片側穿孔である。

4～6は副葬された寛永通寶である。4・5は甕棺の底面近くで人骨の間から確認され、6は頭蓋骨に張り付いた状態で出土した。4は左部分の寶の部分が欠損しており、古・新の何れかを決めるには困難である。

5は新寛永である。「通」の頭の部分が「マ」の形をしていることからマ頭通と呼ばれ、1697年以降に鋳造された「不旧手」に分類される。6は古寛永である。「寶」の字体の貝の部分が「ハ」ではなく「ス」となっていることから、ス貝寶となる。古寛永、新寛永それぞれ一枚ずつが確認されたが、特に新寛永についてでは18世紀初頭まで時代が下る可能性がある。

3 レンチ（第10図）

調査区の平坦面に10m×2mのレンチを設定した。標高は約102.7mを測る。

厚さ約90cmの造成層が全体を覆っており、レンチの東側で一部擾乱による掘り込みが認められた。造成層の中に瓦片、墓石の一部、石燈籠などが混入していた。遺構は認められなかった。

レンチ内に3ヶ所の下層確認レンチを設定し、遺構確認面から約100cmの深さまで掘削した。I層は25～30cm、II層は35～45cm、III層は10～35cm、IV層は段丘礫層上面まで確認していないため、本来の層厚は分からぬ。北側で20cm、中央・南側で30cmを掘削したが、礫層の検出には至らなかった。

4 レンチ（第11図）

調査区の平坦面に15m×2mのレンチを設定した。標高は約103.2mを測る。

厚さ約60～75cmの造成層が全体を覆っており、レンチの東側で擾乱による掘り込みが認められた。造成層の中に瓦片などが混入していた。遺構は認められなかった。

レンチ内に3ヶ所の下層確認レンチを設定し、遺構確認面から約120cmの深さまで掘削した。I層は20～30cm、II層は40～70cm、III層は45～70cm、IV層は段丘礫層上面まで確認していないため、本来の層厚は分からぬ。北側・南側で20cmを掘削したが、礫層の検出には至らなかった。

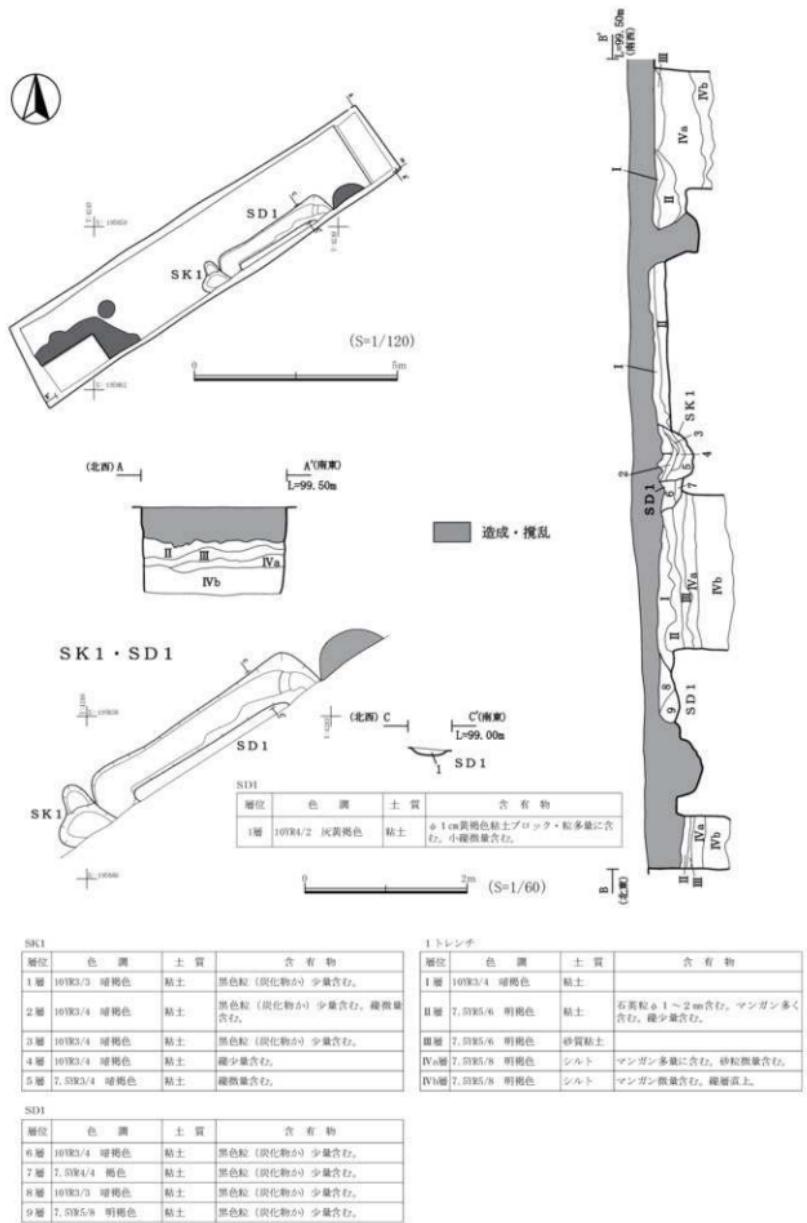
5 レンチ（第12図）

調査区の平坦面に5m×2mのレンチを設定した。標高は約103.2mを測る。

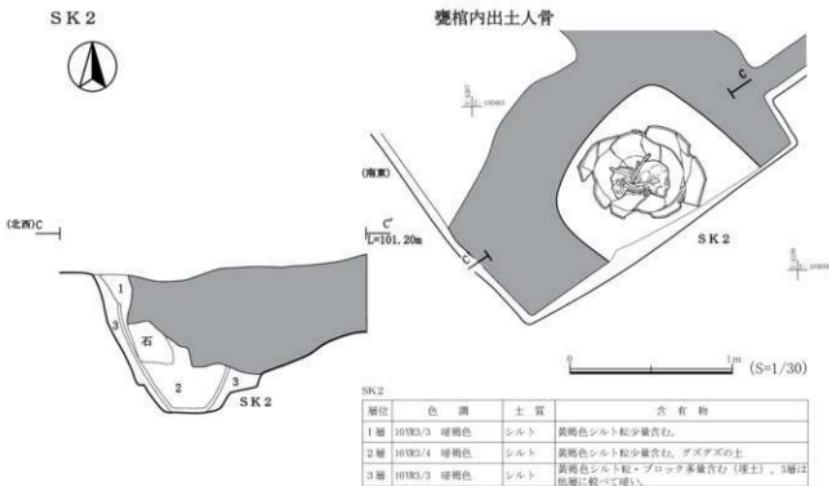
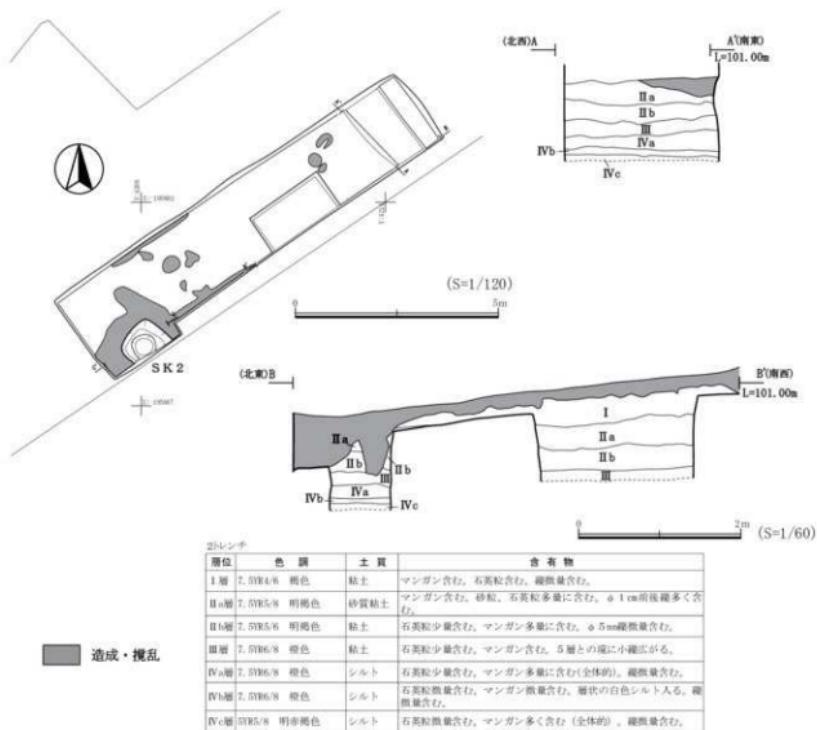
厚さ90～100cmの造成層が全体を覆っており、レンチの大部分で擾乱が認められた。造成層の中に瓦片が混入していたが、余り多くは認められない。

遺構はピットが2基確認されている。P1は埋設管の掘削工事により、半分ほどが削平されている。堆積土は黒褐色土を主体としており、焼土ブロック・焼土粒が含まれている。プランは長軸(48)cm・短軸(15)cm・深さ28cmであり、北東側にテラス状の掘り込みが確認された。P2も同じく掘削工事により、大きな範囲で削られているが、底面は残存している。断面には柱跡と考えられる痕跡が確認されたことから、何らかの建物があった可能性が考えられる。北側は擾乱を受けているため、平面形状は不整橢円形に見える。プランは長軸43cm・短軸35cm・深さ53cmである。

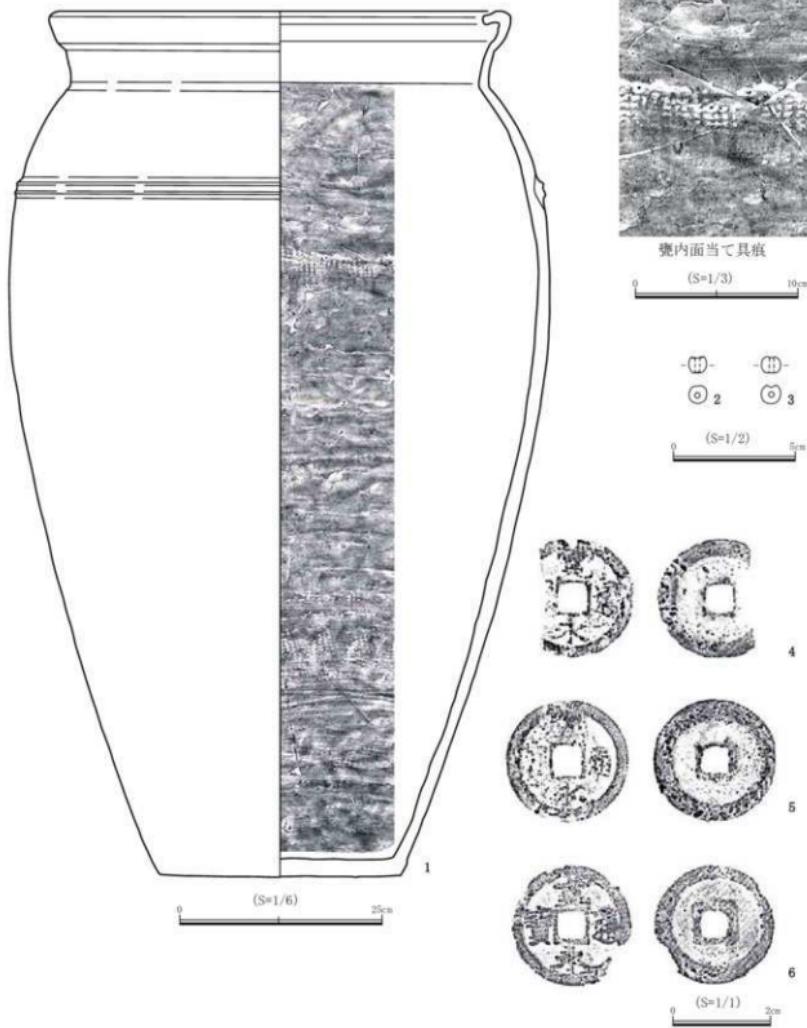
レンチ内に1ヶ所の下層確認レンチを設定し、遺構確認面から約100cmの深さまでを掘削した。I層は20～30cm、II層は25～35cm、III層は5～10cm、IV層は25～55cmを測る。IV層底面では段丘礫層が確認された。III層については層が確認できない箇所もあった。今までのレンチの中でも薄い層厚となっている。



第7図 1 トレンチ (S=1/120・1/60)

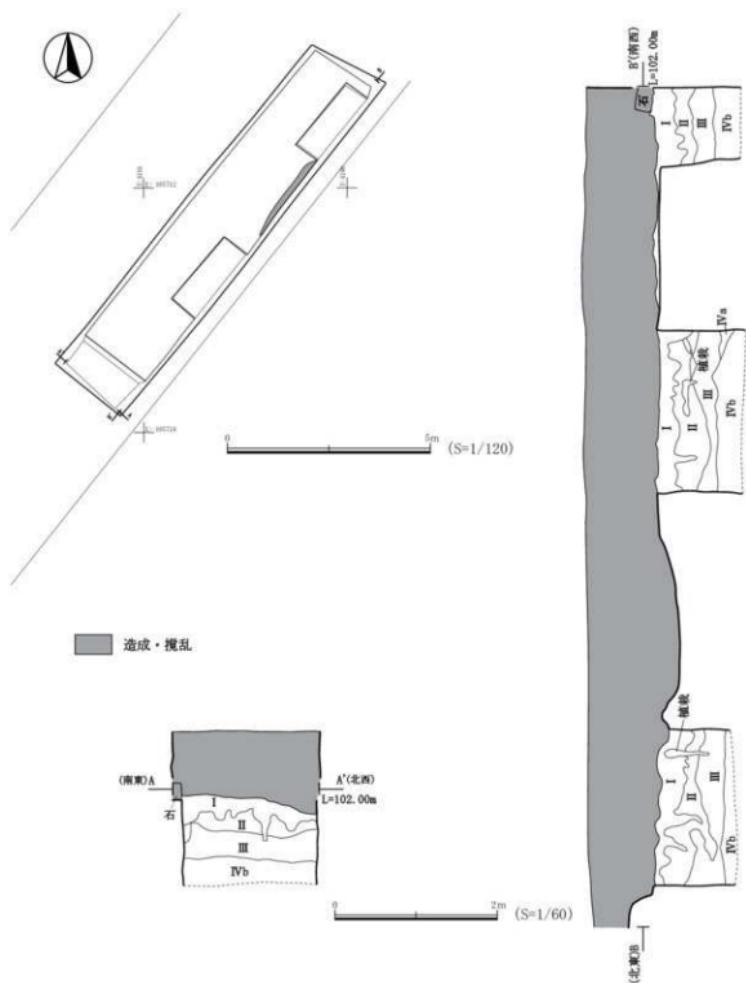


第8図 2トレンチ ($S=1/120 \cdot 1/60 \cdot 1/30$)



辨認番号	調査区・出土層	器種	器高・長 mm	口径・幅 mm	底径・厚 mm	備考	写真番号
第09回-1	SK2	大甕	1064	556	296	最大径664mm, 厚16mm, 底浮き, 17世紀後半	5-1
第09回-2	SK2-櫛組内	板塊 三	6.5	7.5	/	孔径: 2mm	5-2
第09回-3	SK2-櫛組内	板塊 三	6.5	8.5	/	孔径: 1.9mm	5-3
第09回-4	SK2-櫛組内	銭貨	24.91	/	1.64	寛永通寶, 径: 5.77mm	5-4
第09回-5	SK2-櫛組内	銭貨	25.49	/	1.3	寛永通寶(新寛永), 径: 5.68mm	5-5
第09回-6	SK2-櫛組内	銭貨	24.87	/	1.3	寛永通寶(古寛永), 径: 5.6mm	5-6

第9図 2トレンチSK2出土遺物



第10図 3トレンチ (S=1/120・1/60)

6 トレンチ（第13図）

調査区の平坦面に10 m × 2 mのトレンチを設定した。標高は約103.2 mを測る。

厚さ45～55 cmの造成層が全体を覆っており、トレンチの西側及び南東側で擾乱が認められた。造成層の中に瓦片が混入していた。

遺構は認められなかつたが、トレンチの南東側で長楕円形の掘り込みの中に、隅丸方形と楕円形を呈した掘り込みを確認した。当初は遺構の可能性を考えたが、断面を観察すると長楕円形の掘り込みを切るように隅丸方形と楕円形の掘り込みが認められた。堆積土の色調は褐色を呈し、隅丸方形・楕円形をさらに切るような形で掘り込みが認められるため、植栽痕などの新しい擾乱と判断した。

トレンチ内に1ヶ所の下層確認トレンチを設定し、遺構確認面から約100 cmの深さまで掘削した。段丘礫層の上面を確認するために、さらに一部分を40 cm以上掘り下げたが礫層の検出には至らなかつた。I層は25～40 cm、II層は40～60 cm、III層は30 cm、IV層は段丘礫層上面まで確認していないため、本来の層厚は分からず。部分的な掘り下げを実施し25 cmを掘削したが、礫層の検出には至らなかつた。

7 トレンチ（第14図）

調査区の平坦面に10 m × 2 mのトレンチを設定した。標高は高いところで約103.0 m、低いところで約102.7 mを測り、高低差は約30 cmである。緩やかに南西側に傾斜している。

厚さ約60 cmの造成層が全体を覆っており、トレンチ中央を縦断するように擾乱が認められた。造成層の中に瓦片が混入していた。遺構は認められなかつた。

トレンチ内に3ヶ所の下層確認トレンチを設定し、遺構確認面から約100 cmの深さまで掘削をしたが、段丘礫層の上面を確認するために、さらに一部の掘削をおこなつた。北側トレンチで35 cm、中央トレンチで50 cmを掘り下げたところで礫層上面を検出した。南側トレンチは遺構確認面から100 cm掘り下げたところで、一部礫層上面が検出された。検出面を追って精査をおこなつたところ、東側のほうに傾斜していることが明らかとなつた。

層厚はI層25～45 cm、II層20～30 cm、III層20～25 cm、IV層40～95 cmを測る。

8 トレンチ（第15図）

調査区の南東側の傾斜面に10 m × 2 mのトレンチを設定した。標高は高いところで約101.4 m、低いところで約100.7 mを測り、高低差は約70 cmである。

厚さ20～50 cmの造成層が全体を覆っており、トレンチの西側半分がやや溝状のようになつてゐた。造成層の中に瓦片が混入していた。遺構は認められなかつた。

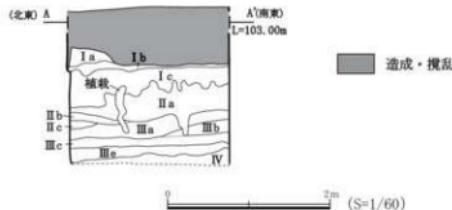
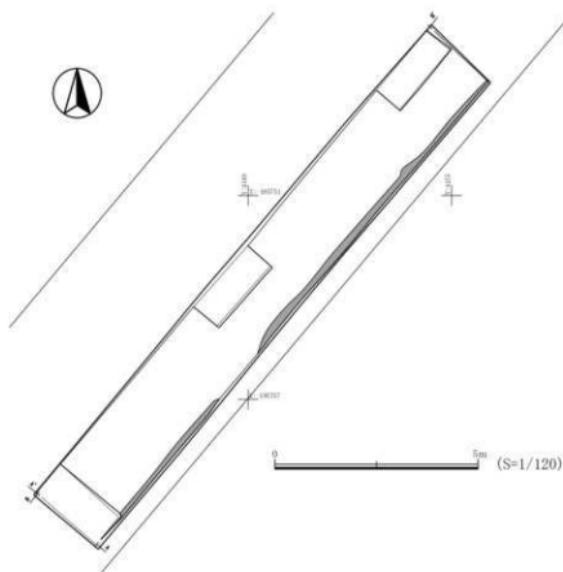
トレンチ内に3ヶ所の下層確認トレンチを設定し、遺構確認面から80～90 cmの深さまで掘削した。I層は削平されておりII層以下を確認した。南側トレンチで段丘礫層上面を検出している。IV層の厚さは約60 cmであり、II・III層がかなり薄くなっている。

層厚は、II層15～50 cm、III層15～30 cm、IV層60 cmを測る。南側トレンチではII・III層の分層が困難であったため、一括して扱つた。

9 トレンチ（第16図）

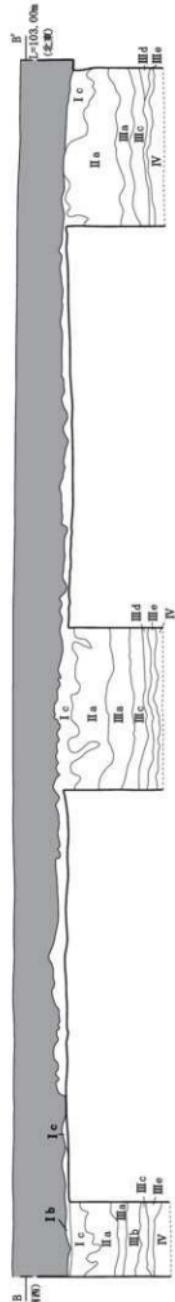
調査区の平坦部分に10 m × 5 mのトレンチを設定した。標高は約103.0 mを測る。

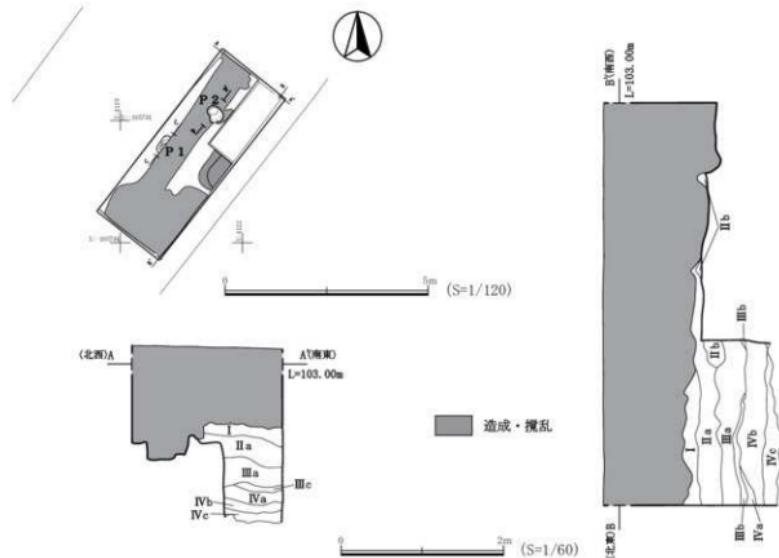
現地表面から工事掘削深度まで掘削したが、全体的に粘土と礫が混じる造成層であった。部分的に遺構確認面まで掘削をおこない、その状況を把握した。サブトレンチは東側に2ヶ所設定し、確認面までの深度は約50 cmであった。北側のサブトレンチでは全体に確認面が検出されたが、南側では半分ほど浅い擾乱が認められた。



層位	色調	色調	含 有 物
I a層	7.5YR 3/3	暗褐色	粘土。マンガン含む。石英粒微量含む。
I b層	7.5YR 4/3	褐色	粘土。マンガン多量に含む(層状)。堆積層と思われる。
I c層	7.5YR 4/6	褐色	粘土。マンガン。石英粒多量に含む。縦±1cm間少量含む。
II a層	7.5YR 5/6	明褐色	砂質粘土。マンガン含む。石英粒多く含む。縦±1cm含む。
II b層	7.5YR 6/9	暗色	砂質粘土。マンガン含む。石英粒多量に含む。縦微量含む。
II c層	7.5YR 5/8	明褐色	砂質粘土。マンガン含む。石英粒多量に含む。縦含む。
III a層	7.5YR 6/6	暗色	砂質粘土。マンガン含む。石英粒多量に含む。縦含む。
III b層	7.5YR 5/9	明褐色	砂質粘土。マンガン多く含む。石英粒多量に含む。砂粒、縦含む。
III c層	7.5YR 6/6	暗色	砂質粘土。マンガン含む。石英粒多量に含む。砂粒、縦含む。
III d層	7.5YR 5/6	明褐色	砂質粘土。マンガン多く含む。石英粒多く含む。縦含む。
III e層	7.5YR 7/8	黄褐色	砂質粘土。マンガン少量含む。石英粒±2~3mm多量に含む。縦多量含む。IV層との境にマンガンが層状に広がる。
IV層	7.5YR 5/6	明褐色	シルト。マンガン多量に含む。石英粒微量含む。硬±1cm層。

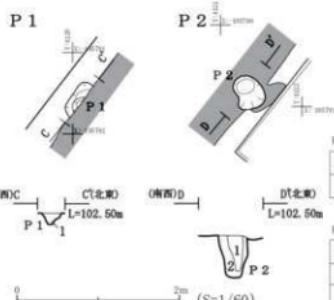
第 11 図 4 トレチ (S=1/120・1/60)



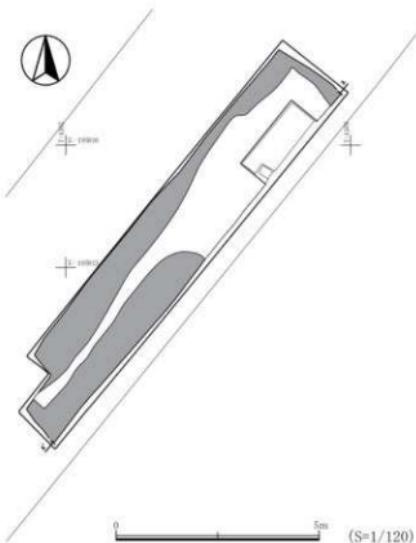


5 トレンド

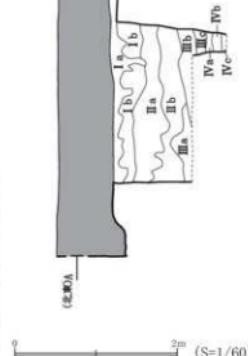
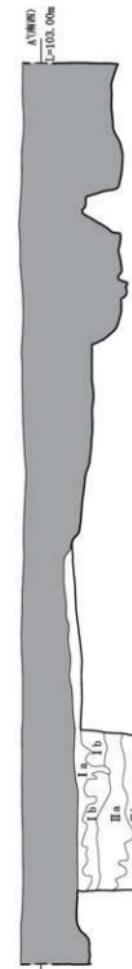
層位	色 調	土 質	含 有 物	
			マニガン	石英粒
I層 7.SYR4/4	褐色	粘質土	多く含む。	少く含む。褐色土粘質土含む。
IIa層 7.SYR4/6	褐色	砂質土	多く含む。石英粒多量に含む。	少く含む。小礫(細灰岩)少量含む。
IIb層 7.SYR6/8	緑色	砂質粘土	多く含む。石英粒多量に含む。	少く含む。小礫(細灰岩)少量含む。
IIIa層 7.SYR6/8	緑色	砂質粘土	多く含む。石英粒多量に含む。	多く含む。小礫(細灰岩)多量に含む。長石粒含む。
IIIb層 7.SYR6/8	緑色	砂質粘土	多く含む。石英粒多量に含む。	多く含む。長石粒含む。
IVa層 7.SYR7/6	緑色	シルト	石英粒少く含む。	砂粒微量含む。
IVb層 7.SYR7/6	明黄褐色	シルト	マニガン粒・砂粒含む。	石英粒少く含む。
IVc層 10SYR6/6	明黄褐色	シルト	マニガン粒・砂粒含む。	石英粒少く含む。



第12図 5 トレンド (S=1/120・1/60)



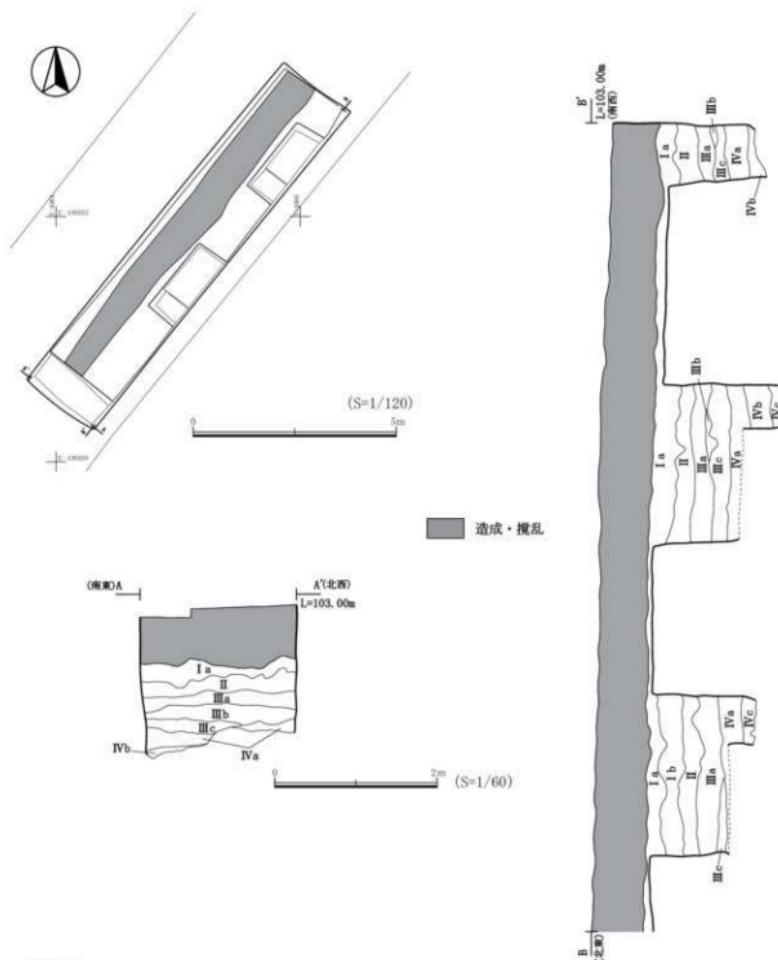
■ 造成・搅乱



6 トレンチ

層位	標準土色	色調	含有物
I a層 7.5YR4/4	褐色	粘土	マンガン多く含む。石英粒含む。褐色粘土鉱・ブロック含む。
I b層 7.5YR5/4	にじみ褐色	粘土	マンガン含む。石英粒多く含む。
II a層 7.5YR5/6	明褐色	砂質粘土	マンガン含む。石英粒多く含む。長石粒微量含む。砂粒多量に含む。
II b層 7.5YR5/6	明褐色	砂質粘土	マンガン含む。石英粒多く含む。長石粒微量含む。砂粒微量含む。
III a層 7.5YR5/6	明褐色	砂質粘土	マンガン少々含む。石英粒少々多量に含む。長石粒微量含む。砂粒含む。 縞〔凝灰岩〕少々含む。
III b層 7.5YR6/6	褐色	砂質粘土	マンガン少々含む。石英粒少々多量に含む。長石粒微量に含む。砂粒含む。 縞〔凝灰岩〕含む。
III c層 5YR5/8	明赤褐色	砂質粘土	マンガン微量含む。石英粒少々多量に含む。長石粒微量含む。縞〔凝灰岩〕含む。
IV a層 7.5YR6/8	褐色	砂質粘土	マンガン多量に含む。石英粒少々多く含む。長石粒微量含む。縞〔凝灰岩〕含む。
IV b層 7.5YR5/6	明褐色	シルト	マンガン少々含む。石英粒含む。長石粒微量に含む。
IV c層 10YR5/8	黄褐色	シルト	マンガン少々含む。石英粒少々少量含む。

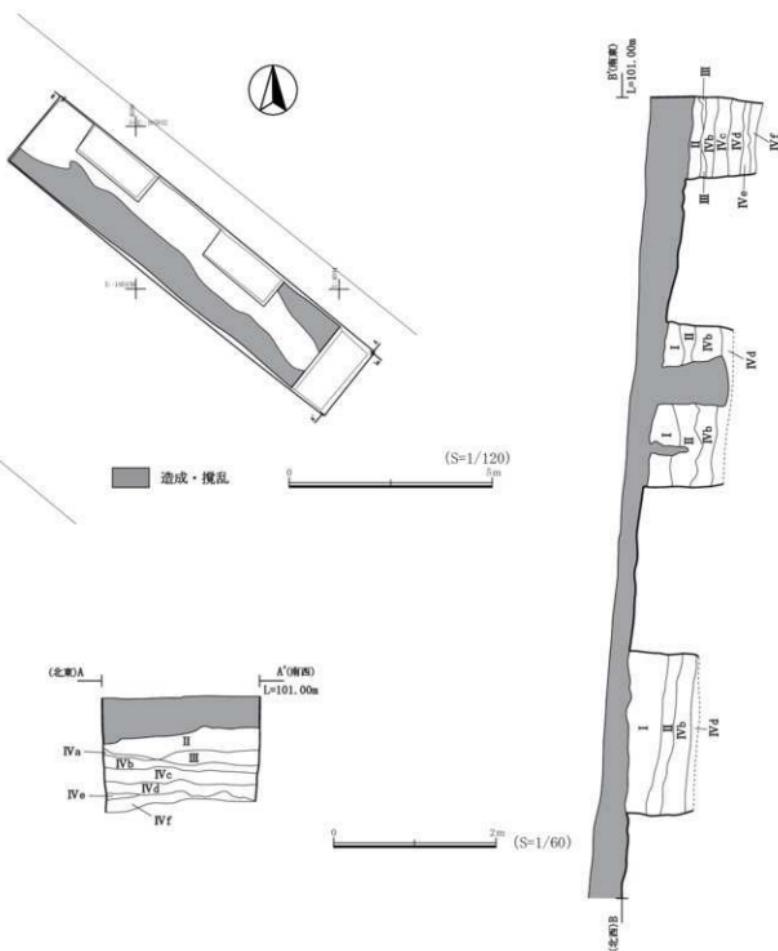
第13図 6 トレンチ (S=1/120・1/60)



7トレンチ

層位	色調	土質	含有物
I a層 7.51m/4.6	褐色	粘土	マンガン多く含む。石英粒少數含む。
I b層 7.51m/5.6	明褐色	粘土	マンガン多く含む。石英粒、長石粒微量含む。
IIa層 7.51m/7.6	褐色	砂質粘土	マンガン含む。石英粒含む。長石粒微量含む。繊（凝灰岩）少數含む。
IIb層 7.51m/7.6	淡褐色	砂質粘土	マンガン含む。石英粒多く含む。長石粒微量含む。繊（凝灰岩）含む。
IIc層 7.51m/7.6	褐色	砂質粘土	マンガン含む。石英粒多く含む。長石粒微量含む。砂（凝灰岩）部分あり (7.51m/6)。
IIIa層 7.51m/6.6	褐色	砂質粘土	マンガン多量に含む。石英粒多く含む。砂粒微量含む。繊（凝灰岩）多量に含む。
IVa層 7.51m/6.6	明褐色	シルト	マンガン多量に含む。石英粒少數含む。
IVb層 7.51m/6.6	褐色	シルト	マンガン含む。石英粒少數含む。砂粒微量含む。
IVc層 7.51m/6.6	褐色	シルト	マンガン含む。石英粒、砂粒少數含む。

第14図 7トレンチ ($S=1/120 \cdot 1/60$)



8トレンチ				
層位	色調	土質	含有物	
I層 7.5mE/6	明褐色	砂質粘土	マシガソ多々含む。石英粒多々含む。長石粒微量含む。繊(凝灰岩)少少量含む。砂粒含む。	
II層 7.5mE/6	褐色	砂質粘土	マシガソ含む。石英粒多く含む。長石粒微量含む。砂粒。小礫含む。	
III層 7.5mE/6	褐色	砂質粘土	マシガソ多量に含む。石英粒含む。長石粒微量含む。	
IVa層 7.5mE/6	明褐色	シルト	マシガソ多く含む。石英粒少少量含む。	
IVb層 7.5mE/8	明褐色	シルト	マシガソ含む。石英粒少少量含む。	
IVc層 7.5mE/6	明褐色	シルト	マシガソ含む。砂粒少少量含む。石英粒少少量含む。	
IVd層 10.0mE/6	明黃褐色	シルト	マシガソ含む。砂粒含む。石英粒少少量含む。	
IVe層 7.5mE/6	褐色	シルト	マシガソ少量含む。石英粒微量含む。砂粒含む。	
IVf層 7.5mE/8	褐色	シルト	マシガソ多く含み。IVe層、IVf層との間に層状にみられる。	

第15図 8トレンチ (S=1/120・1/60)

10 レンチ (第 16 図)

調査区の平坦部分に $10\text{ m} \times 5\text{ m}$ のレンチを設定した。標高は約 103.0 m を測る。

現地表面から工事掘削深度まで掘削したが、全体的に粘土と礫が混じる造成層であった。部分的に遺構確認面まで掘削をおこない、その状況を把握した。サブルンチは中央に 2ヶ所設定し、確認面までの深さは現地表から約 50 cm であった。

遺構は SK 3 土坑、布基礎と推定される掘り込みが検出された。2つの遺構の前後関係は、SK 3 よりも布基礎のほうが新しい。SK 3 の堆積土は、褐色粘土に明黄褐色粘土ブロックが混じり、比較的新しい近世の遺構と考えられる。布基礎の掘り込みによって多少プランの形状は歪んだようになっているが、本来は隅丸方形のような形を呈していたと思われる。遺構確認に留めているため、掘り込みの深さは明らかではない。プランは長軸 70 cm・短軸 56 cm である。

11 レンチ (第 16 図)

調査区の平坦部分に $10\text{ m} \times 5\text{ m}$ のレンチを設定した。標高は約 103.0 m を測る。

現地表面から工事掘削深度まで掘削したが、全体的に粘土と礫が混じる造成層であった。部分的に遺構確認面まで掘削をおこない、その状況を把握した。レンチの北側では 25 cm 掘削したところで遺構確認面が検出されたが、9・10 レンチと同様に西側に 2ヶ所のサブルンチを設定した。

南側のサブルンチは掘削深度 2 m 以上に達したところで基盤層が確認された。急激に落ち込んでいることから、後世に大きな搅乱を受けていると考えられる。

土壘 (第 3・17 図)

丘陵の中央部分に位置する平坦面に、土壘が認められる。土壘の発掘調査はおこなわれていないため、詳細は不明である。現存の高さは約 1.3 m であり、基底幅は 4~5 m を測る。大年寺山門から階段を上がり、そのつきあたりから約 20 m ほどのところから北東方向へ延びて、途中で北西方向に 90 度向きを変えている。

測量した土壘の長さは南西~北東方向で 80 m、南東~北西方向で 50 m を測る。実際には計測値以上に残存しており、平場を囲っている可能性もあるが、今回の調査では把握するには至らなかった。

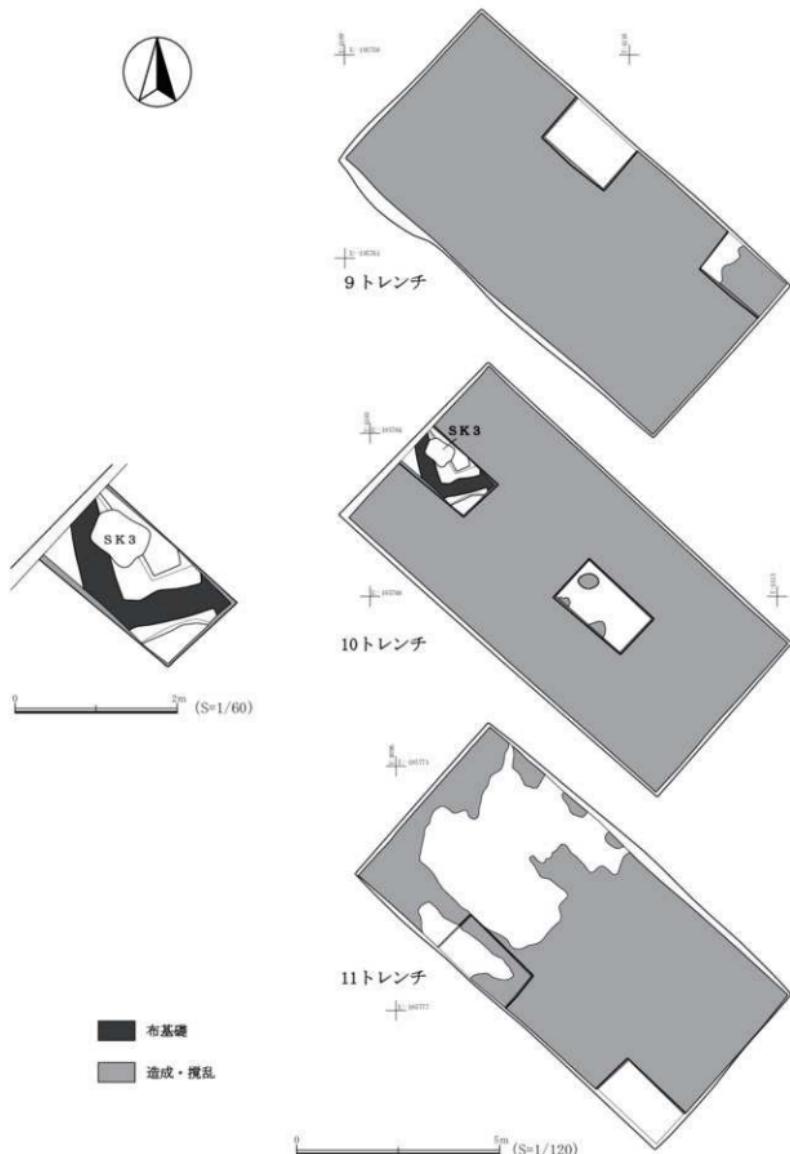
土壘の現状を把握するため、25 cm 間隔の等高線図を作製した。第 17 図の等高線図を見ると、土壘が切れた部分が 2ヶ所確認できる。北東辺については道を据え付けるため、後世に切られたようである。南東側の切れた部分の中央に、門柱の礎石と思われるものが残存している。一部欠損しているが四方とも面取りがおこなわれ、中央部分には方形形状に削った後に、さらに一段低く円形に削り取っている。同じような形状に加工された柱穴の可能性も考えられるが、門の門の役割をしていた可能性も考えられよう。

第 2 節 遺構外出土遺物 (第 18 ~ 21 図)

1 次調査では瓦片が最も多く、総点数 787 点、総重量 115,085 g が出土した。全て造成層からの出土であり、遺構からは出土しなかった。瓦には、全体が濃い灰色を呈する種し瓦と、主に凸面側に褐色の釉を施釉した陶器瓦の 2 種類がある。前者を I 群、後者を II 群としてレンチごとに分類し、その数量と重量の集計表を作製した (表 2)。

数量的に丸瓦、平瓦が多く出土している。軒丸瓦や軒平瓦といった瓦当部のあるものは 36 点認められ、全体の 4.5% である。その他に I 群の棟瓦が 3 点認められている。

11ヶ所のレンチの内、遺物がまとめて出土点数と重量を見ると、7 レンチは 336 点 (29,400 g)、2 レンチの 248 点 (55,925 g)、3 レンチの 119 点 (15,850 g)、5 レンチの 41 点 (4,370 g) となる。その他の



第16図 9・10・11 トレンチ (S=1/120・1/60)

トレンチではいずれも 20 点未満である。瓦の出土状況をみると、I 群の瓦は 1 ~ 3、5 ~ 9 トレンチで出土しているが、4、10、11 トレンチでは出土していない。2 トレンチでは 248 点の内 74 点が I 群に属す。3 トレンチでは 119 点の内 3 点が I 群に、5 トレンチでは 41 点の内 29 点が I 群に属す。7 トレンチでは 1 点を除き 336 点が I 群に属している。II 群の瓦は全てのトレンチから出土している。以下から出土遺物について説明する。

1 は II 群の軒丸瓦であり一部が欠損する。凸面の調整は縦方向のナデであり、凹面には布目痕が認められる。丸瓦の行基の近くに径 1.9 cm の釘穴が 1 ヶ所開けられている。

2 は II 群の軒丸瓦で瓦当部のみが半分ほど残存する。文様は伊達家の家紋の一つである、牡丹文が認められる。

3 は I 群の軒丸瓦の瓦当部であり、1 / 4 ほど残存している。文様は堅三引両文である。丸瓦との接合部が確認できるため、瓦当の上部分であることが分かる。

4 は I 群の軒丸瓦の一部分である。九曜文を構成する小円の一部が確認できる。瓦当部裏面に丸瓦との接合部が認められることから、その上部分であることが分かる。

5 は I 群の軒平瓦の瓦当部で半分ほど残存している。瓦当部の中心文様は桜文・三枚桜である。左側の飛雲唐草文が認められる。

6 は II 群の軒平瓦の瓦当部の一部である。正面左側の残存であり、中央に三引両文の一部が認められ、その左側には飛雲唐草文が認められる。

7 は II 群の軒平瓦の瓦当部の一部である。正面右側の残存であり、中央に三引両文が配置されており、その右側には飛雲唐草文が認められる。

8 は I 群の軒平瓦である。瓦当部の一部が残存し、顎貼り付けと思われる。瓦当部の中心文様は、桜文・雪持ちである。飛雲唐草文が部分的に認められる。

9 は I 群の軒平瓦である。瓦当部の一部のみ残存している。瓦当部の中心文様は三引両文であり、その右側に降線唐草文と思われる一部が認められる。接合部分で平瓦から剥離している。

10 は II 群の丸瓦である。一部欠損するもののほぼ全体の様相が分かる資料である。凹面の面取りは丁寧におこなわれており、布目痕は明瞭に観察できる。凸面の調整は縦方向のナデが認められる。釘穴は認められない。

11 は I 群の丸瓦の一部と思われる。玉縁、行基の両側が欠損しているため明確なことは分からぬ。凹面は横方向のナデ、凸面には縦方向のナデが施される。また、凸面には丸に横の刻印が認められる。

12 は II 群の丸瓦の一部である。玉縁側が残存しており、丸瓦の部分に釘穴が認められる。凹面には布目痕が明瞭に観察できる。凸面には調整の跡が認められない。削りの痕を丁寧に撫で消したかどうかは、釉が厚くかけられているため不明である。

13 は I 群の丸瓦の一部である。玉縁が欠損した痕跡が認められる。釘穴の半分ほどが残存している。裏面には粗い横方向のナデが施されているが、布目痕を消しきれていない。表面は縦方向の削りが施された後に縦方向のナデがおこなわれている。また、凸面には木瓜形に四つ花弁の刻印が認められる。

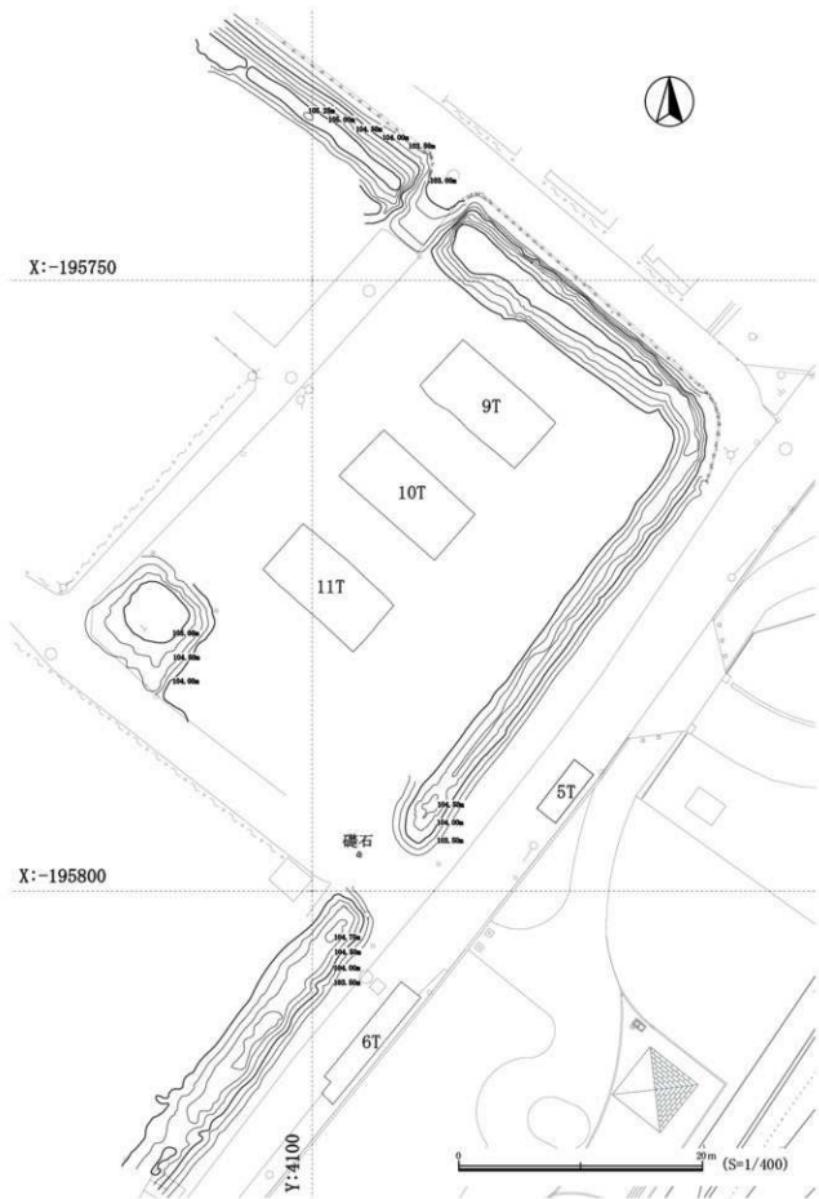
14、15 は共に II 群の平瓦の一部と思われる。2 点とも全体の 1 / 4 程度しか残存していないため、軒平瓦かどうかの判断は困難である。14 の全面に釉がかけられているが、15 には掛かっていない箇所が認められる。

16 は I 群の平瓦の一部と思われる。表面は横方向のナデにより調整され、裏面はタテ方向のナデが認められる。

17 は II 群の面戸瓦の一種と思われる。一部欠損している。両面とも厚い釉が掛かっているが、凹面には布目痕が認められ、凸面には縦方向のナデが認められる。側面は緩やかな湾曲を描くように調整されている。

18 は I 群の鬼瓦の一部分である。正面右側の一部が残存する。裏面には横の部材との撫で付けが顕著に認められる。

19 は I 群のは種不明の他の瓦である。断面は三角形を呈しており、先端部分も同様に三角形を呈している。船の舳先を連想させる。裏面には接合面と思われる刻みがつけられているため、道具瓦の何らかの部材が剥落したも



第 17 図 土壠全体図 (S=1/400)

のと思われる。

20はII群は鬼瓦の開りが一部残存する。表面には他の部材と接合するための溝が付けられている。裏面には連続する浅い窪みが認められる。貼り付けのための指頭圧痕の可能性もある。

21はII群の鬼瓦もしくは鳥伏間瓦の文様部分のみが残存したものとみられる。堅三引両文が認められる。瓦当の直径は17cmを測り、軒丸瓦よりも一回り大きい。軒平瓦に乗るような造りではなく、繋ぎの部分が撫で付けられている。

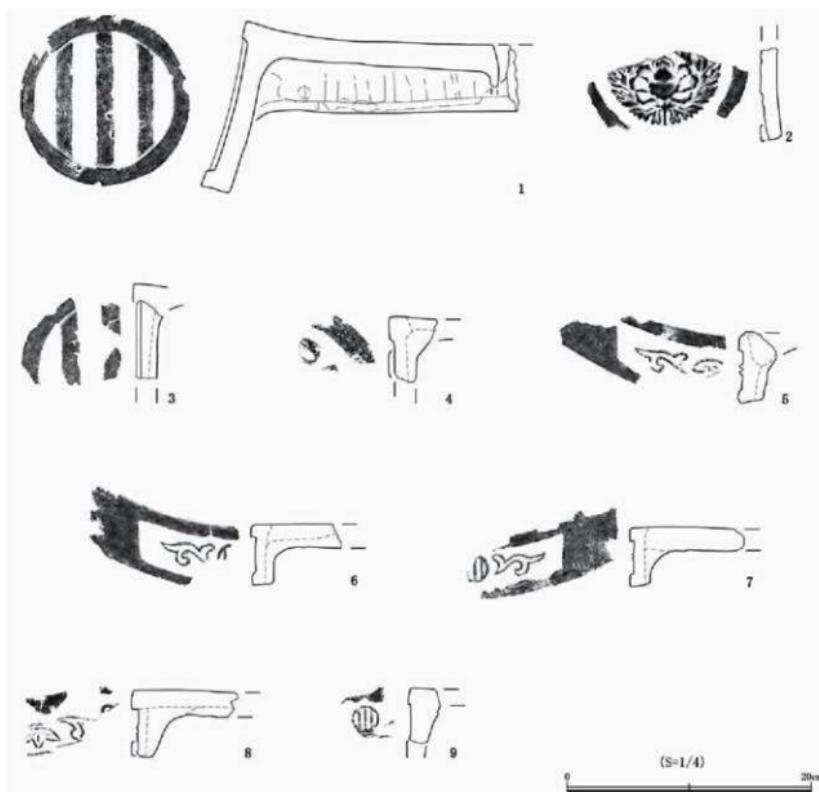
22は3トレンチから出土した石燈籠の一部分である。竿の部分と考えられるが、残存状況を考慮するとやや背が低いように映る。全体的に上部が開いた円錐状を呈している。上面には中台との接続部分と思われる、径55mm、深さ47mmの臍孔が穿たれている。底面については摩滅したような痕跡が認められることから、元々このような形態であり基礎に接続していたと思われる。下部のほうに突出した節が作り出されている。上面から約2cm下のところに1周する深い溝が認められる。また、「施主 自保院」という線刻が施されている。石材は安山岩と思われる。

23は3トレンチから出土した石燈籠の一部分である。竿の部分と考えられる。上半部は後世の打ち欠きにより、欠損している。臍孔が若干残存していることから、それほど背の高いものではなかったと考えられる。23よりも一回り小形である。形態的にはほぼ同じような形をしている。一部分ではあるが線刻が施されており、「年カ」などの字と思われる。臍孔については残存値であるが、底径54mm・深さ25mmを測る。石材は安山岩と思われる。

24は3トレンチから出土した水鉢である。一部後世の欠損が認められるが、ほぼ完全な状態で出土した。両側面、表面及び上面は丁寧な仕上げが施されているが、裏面と底面は加工痕がそのまま残されている。表面の下半部には浅く半円形に抉られている。仕上げが施されず、加工痕がそのままの状態で認められることから、水鉢が造られた時期と下半部の加工の時期は異なるかもしれない。上面には、長軸19.4cm・短軸9.7cm・深さ3.5cmの水を受ける部分が丁寧に造られている。正面の上部中央に「上」の線刻が認められる。また、右下には縦に3行、「らけカ」「ゑん」「てよ」の平仮名と思われる線刻が認められる。石材は安山岩と思われる。

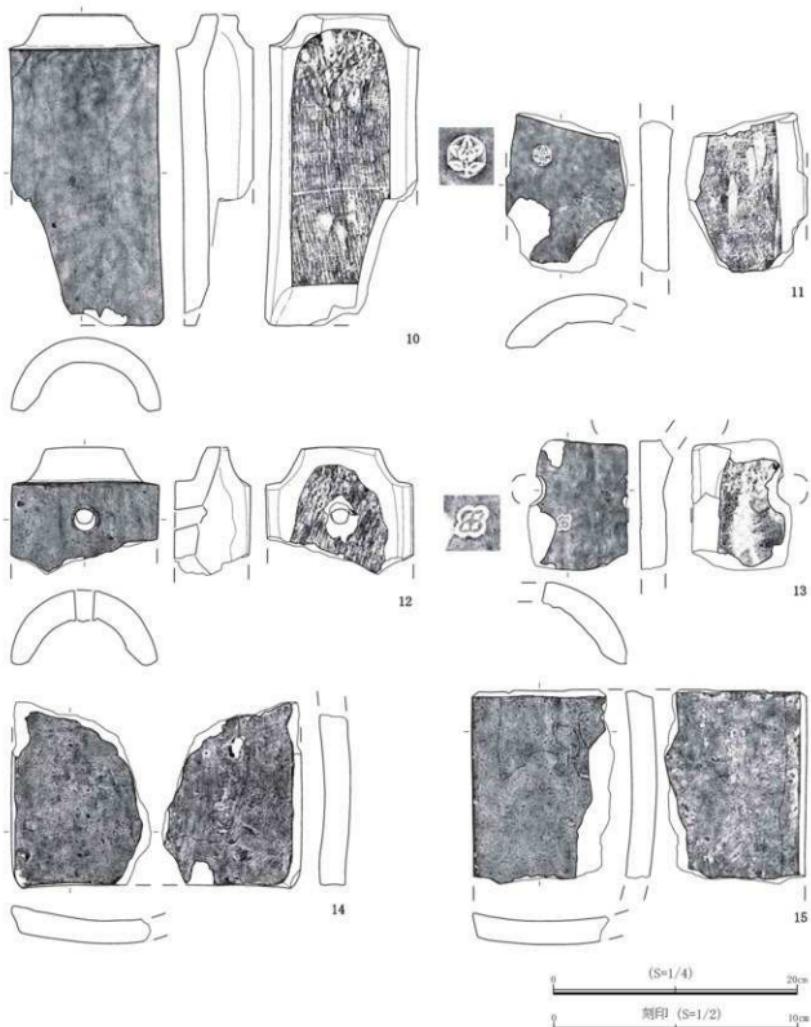
25は縄文時代後期の口縁部片である。口唇部は平坦に調整されている。口縁からやや下がった辺りに、粘土紐を貼り付け隆帯を作り出している。隆帯の上端と下端は浅く撫で付けられている。また、隆帯には単節LR縄文が施文されている。

26は切込焼の碗と思われる。底部は残存していないが、全体の2/3ほどが残存している。口唇部直下と底部近くに一重圓線を描き、その後に縦の直線を等間隔に描いている。口唇部直下の横の直線と縦の直線は交差せず、連弧文を描いて繋げ、虫龍文を描く。製作年代は1820年代～1860年代と考えられる。



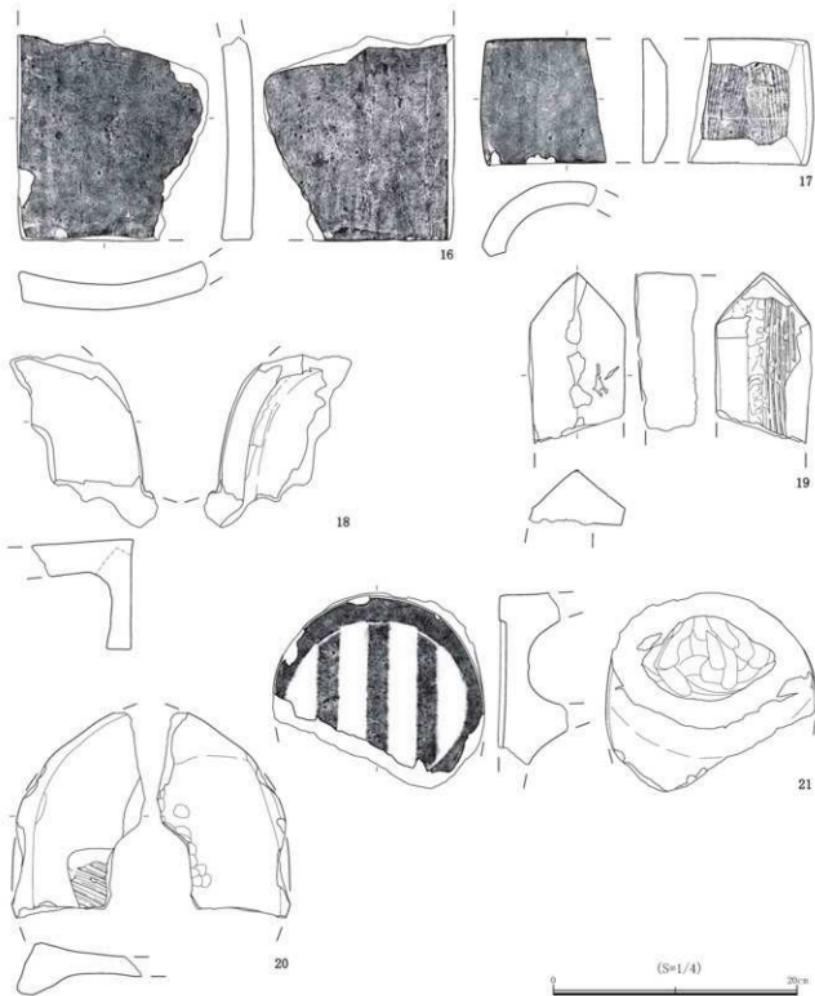
第18図 遺構外出土遺物（1）

博品番号	調査区・出土場	器種	全长 mm	幅 mm	厚さ mm	瓦当径 mm	瓦当厚(軒丸)	瓦当長(軒平)	瓦当厚(軒平)	備考	写真番号
第1804-1	2T・造成層	軒丸瓦	(260)	141	21					釘孔1ヶ所 孔径19mm	6-1
第1804-2	2T・造成層	軒丸瓦	-	-	-	140	16				6-2
第1804-3	2T・造成層	軒丸瓦	-	-	-	(150)	21				6-3
第1804-4	6T・造成層	軒丸瓦	(142)	(63)	18	(160)	18				6-4
第1804-5	2T・造成層	軒平瓦	(740)	(130)	19			50	17		6-5
第1804-6	7T・造成層	軒平瓦	(880)	(89)	20			56	21		6-6
第1804-7	2T・造成層	軒平瓦	(940)	(143)	19			49	19		6-7
第1804-8	5T・造成層	軒平瓦	(540)	(79)	18			54	18		6-8
第1804-9	2T・造成層	軒平瓦	(45)	(54)	17			45	17		6-9



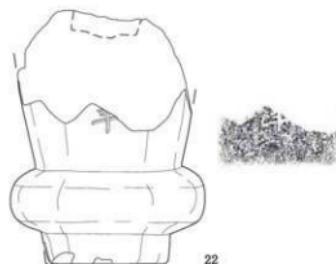
件名番号	調査区・出土層	岩種	全長 mm	幅 mm	厚さ mm	瓦当径 mm	瓦当厚(軒丸)	瓦当長(軒平)	瓦当幅(軒平)	備考	写真番号
第1958-10	7T・造成層	丸瓦	255	126	20					U縫長:25mm	6-10
第1958-11	7T・造成層	丸瓦	(132)	(100)	22						6-11
第1958-12	2T・造成層	丸瓦	(105)	120	21					釘孔1ヶ所 瓦径:15mm/U縫長:26mm	6-12
第1958-13	7T・造成層	丸瓦	(108)	(82)	21					U縫欠損	6-13
第1958-14	2T・造成層	平瓦	(154)	(115)	29						6-15
第1958-15	2T・造成層	平瓦	(159)	(117)	19						6-14

第19図 遺構外出土遺物（2）



探査番号	調査区・出土層	器種	全長 mm	幅 mm	厚さ mm	瓦当径 mm	瓦当厚(軒丸) mm	瓦当長(軒平) mm	瓦当厚(軒平) mm	備考	写真番号
第2058-16	2T・造成層	平瓦	(169)	(157)	21						7-16
第2058-17	10T・造成層	面戸瓦	194	(97)	19						7-17
第2058-18	2T・造成層	鬼瓦	(142)	(121)	25						7-18
第2058-19	2T・造成層	その他瓦	(141)	(79)	46						7-19
第2058-20	3T・造成層	鬼瓦	(169)	(109)	15						7-20
第2058-21	4T・造成層	鳥伏開瓦	(59)	—	—	175	25				7-21

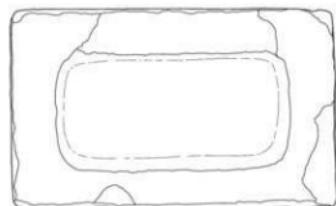
第20図 遺構外出土遺物（3）



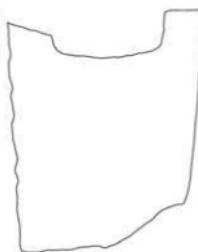
22



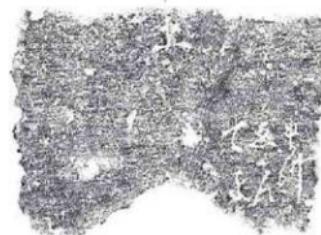
23



24



25



(S=1/4)

20cm



(S=1/3)

10cm

補図番号	調査区・出土層	器種	沿高・長 mm	口径・幅 mm	底径・厚 mm	備考	写真番号
第21図-22	3T・造成層	石燈籠	1299	160	157	焼孔 底径:54mm・深さ:25mm、「年方」の縦刻	7-22
第21図-23	3T・造成層	石燈籠	312	185	185	焼孔 直径:55mm・深さ:47mm、「施主自保院」の縦刻	7-24
第21図-24	3T・造成層	木鉢	270	198	164	正面上端中央に「上」、右下に「て上・左ん・うけか」の縦刻	7-23
第21図-25	1T・造成層	調文土器	/	/	/	9 調文時代後期網目1式	8-25
第21図-26	3T・造成層	瓶	300	87	/	切込焼、虫歯文	8-26

第21図 遺構外出土遺物(4)

第3節 墓棺内出土人骨

人骨の出土状況については第8図に示しているとおりであるが、実際には墓棺内の堆積土の粘性が強く、発掘調査の段階で人骨の輪郭を明らかにさせることは困難であった。図化したものは判別が可能であったものに限った。

壺の中に土が堆積していたことから、壺の蓋として用いていた板材などが腐食し、内部に土が崩落したと考えられる。そのため、埋葬された人骨も崩落土の土圧により、原位置は保ってはいないと考えられる。人骨の各部分を見ても解剖学的に関節した状況ではなく、土圧を受け乱れていたことは確かであろう。

人骨は、頭蓋骨の前面を南に向け、大後頭孔を上にした状況で出土した。上頸骨は遺存していたが、歯の何本かは原位置にはなかった。当初、頭蓋骨の周りを外表骨が覆っていたため、縫合線を確認することができなかつたが、清掃する段階になり縫合線（ラムダ縫合）を確認することができた。取り上げをおこなった際、寛永通寶（第9図-6）が頭頂骨に張り付いた状態で出土した。

頭蓋骨に乗るような形で、左上腕骨が前を上向きにして検出された。右上腕骨は頭蓋骨に下端が接した状況で検出されている。両方とも上腕骨頭は認められない。

頭蓋骨の西側に右寛骨が認められる。脛骨窩を東側に、閉鎖孔を西側に向いているが、閉鎖孔自体は認められなかつた。大坐骨切痕はやや開き気味のように映る。寛骨の南側に仙骨があるが、取り上げ当初はあまりはっきりとはしなかつた。後面を表にした状況で検出された。

その他に、大腿骨、脛骨、腓骨などは頭蓋骨より下で検出されている。墓棺は座棺であり、人骨の出土状況から姿勢などを明らかにするのは困難であったが、胡坐または正座した状態で埋葬されたものと推定される。

次に、検出された骨の特徴と鑑定結果を合わせて記していく。人骨の鑑定は独立行政法人国立科学博物館人類研究部研究員の坂上和弘氏にお願いした。以下の内容は坂上氏のご教示による。

まず、寛骨に見られる大坐骨切痕の角度が広く、乳様突起や眉弓の発達といった頭蓋形態からも、女性であったと判断される。また、妊娠痕は確認できず、出産経験はない。寛骨の耳状面にみられるシワが明瞭であること、腰椎に加齢による変形が認められること、第3大臼歯の萌芽が認められないこと、そして大臼歯の咬合面に磨り減りがほとんど認められないことから、年齢は20歳代～30歳代、特に20歳代の可能性が高い。

大腿骨のおおよその長さからみて、身長は140cm代後半と推定される。外傷は特になし。

また、頭蓋骨については、眼窩の形状が四角形に近く、鼻根は擴んだような形状をしていることから、彫りの深い顔立ちで、いわゆる縄文顔の人物であったと推定される。下顎に見られる歯列は乱杭で、歯並びが良くない。

そして特筆すべき点として、右上腕骨の三角筋粗面が顕著に発達していることから、右腕の筋力が強かったことが考えられる。一方、膝蓋骨には顕著な変形がみられ、右大腿骨の捻転がかなり強度であることから、右の下肢が不自由であった可能性が高い。右上肢の筋肉の発達は、下肢の不自由を補ったことによるものと推察される。

第3章 2年次 検出された遺構と遺物

第1節 検出遺構

1 トレンチ（第22図）

南東から北西へ下る緩斜面に平行する $25\text{ m} \times 1.8\text{ m}$ のトレンチを設定した。調査区内で標高が最も高く、南東側で約 101.3 m 、北西側で約 99.3 m 、高低差は約 2 m を測る。厚さ $25\sim60\text{ cm}$ の造成層が全体を覆い、遺物は認められなかつた。また、トレンチの南東側は後世の埋設物設置のために深く掘削されていた。

造成層を除去したところ、トレンチの南東側では基盤層が確認されたが、トレンチ南東角から約 7 m 地点より北側は礫層が広がっていた。北側では工事掘削深度に至る前に礫層を検出したため、深掘りを1ヶ所実施した。南側は擾乱の除去部分を深掘りした。

愛島軽石層に相当するⅡ層・Ⅲ層は確認できなかつた。Ⅳ層は $50\sim60\text{ cm}$ の層厚があり、トレンチ南東側でのみ検出されている。造成層の掘削中、擾乱を挟んで粘土層と礫層という対照的な基盤層が確認された。遺構は検出できなかつた。

擾乱の手前までサブトレンチ状にⅣa層から $80\sim90\text{ cm}$ の深さで掘削して、トレンチ南西壁の断面（D-D'')を観察したところ、段丘礫層に斜めに約 40 cm の「食い違い」が生じて、北西側が南東側に乗り上げるように上昇していた。亀裂内部には砂質土～砂質粘土（Ⅳd・Ⅳe層）が堆積していたが、Ⅳc層の一部が流れ込んだものと考えられる。

2-1 トレンチ（第24図）

伊達家墓所の裏手の、北側から南側に向かって開析された斜面地の縁辺を廻るよう、 $46.5\text{ m} \times 2\text{ m}$ の「く」の字状を呈したトレンチを設定した。標高はトレンチの東側で約 99.3 m 、西側で約 98.6 m 、高低差は 0.7 m を測る。

厚さ $20\sim60\text{ cm}$ の造成層が全体を多い、造成層中に多量の瓦片や陶磁器片が混入していた。造成層を除去すると、Ⅱ層相当の石英粒と凝灰岩の小礫を含んだ黄褐色砂質粘土層が確認された。遺構は認められなかつた。

遺構確認面は工事の掘削が及ぶとされていた深度よりも全体的に高いところに位置していたため、確認面より下は工事の影響を受けることが想定された。そのため下層調査を目的としてサブトレンチを4ヶ所設定し、 $98.77\sim97.66\text{ m}$ の工事掘削深度まで掘削した。工事掘削深度に達したところで、Ⅱ層上半部と判断していた層の下から黒色土、暗褐色土が現われ、その時点では厚さ約 $10\sim40\text{ cm}$ の造成層であったことが明らかとなつた。

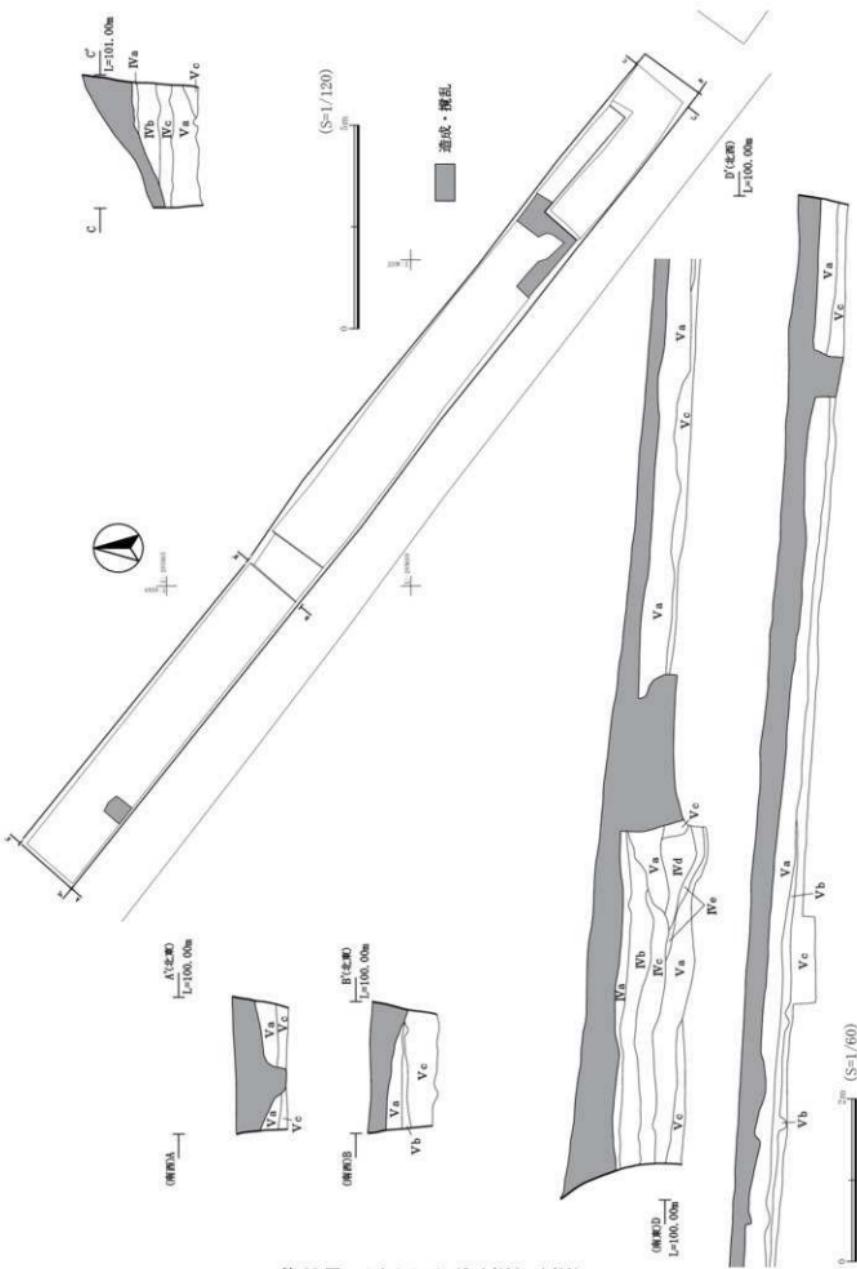
そこで、基盤層の堆積状況および、遺物出土状況を改めて確認するために、工事掘削深度から約 1 m 掘削したが、4ヶ所のサブトレンチとも基盤層に到達するに到らなかつた。各サブトレンチの断面B-B'、D-D'、F-F'、H-H'をみてみると南から北に向かって傾斜し、特に深掘1・深掘4では急斜面地に造成をおこなつている様子が看取される。

造成層の下から検出された、黒色土層、暗褐色土層には多くの瓦片、陶磁器片が混じっている。瓦片については碎片になっているものが少ない印象を受ける。遺物の中には近代の遺物も含まれているため、造成時期は江戸時代に遡るものではない。

2-2 トレンチ（第24図）

2-1 トレンチ東側の宮城テレビ放送送信所裏手に位置し、緩斜面への変換点に $1.6\text{ m} \times 1.6\text{ m}$ のトレンチを設定した。標高は約 97.8 m を測り、トレンチは若干北側に傾斜している。

掘削は、工事掘削深度の 97.18 m よりやや高い位置に留めて遺構の検出につとめたが、掘削した範囲の深さは造成層中であり、遺構も遺物も認められなかつた。遺構確認面まで達していないため造成層の厚さは不明である。遺



第22図 1トレンチ ($S=1/120 \cdot 1/60$)

1 トレンチ

層位	色 調	土 質	含 有 物
IVa層 10W5/4	にぶい黄褐色	シルト	マンガン、φ 2～5mm繊少量含む。石英粒、長石粒微量含む。
IVb層 10W4/4	褐色	シルト	φ 2～50mm繊少量含む。石英粒。マンガン微量含む。
IVc層 10W6/4	にぶい黄褐色	シルト	φ 2～50mm繊、石英粒微量含む。
IVd層 10W7/6	明黄色	シルト	マンガン斑状に含む。φ 2～20mm繊少量含む。
IVe層 10W7/4	にぶい黄褐色	砂質粘土	マンガン斑状に少量含む。φ 2～10mm繊少量含む。
Va層 10W7/3	にぶい黄褐色	砂繊	φ 2 mm～掌大繊多量含む。
Vb層 10W7/3	にぶい黄褐色	砂	石英粒微量含む。マンガンVb層との境に帶状に多量含む。
Vc層 10W7/6	明黄色	砂繊	φ 2 mm～掌大繊多量含む。マンガンVc層との境に帶状に多量含む。

成層は黄褐色土、黒褐色土の2層であり、堆積状況も北側に傾斜している。

2-3 トレンチ（第23図）

平坦な地形に1.8 m × 1.5 mのトレンチを設定し、標高は約99.3 mを測る。

厚さ約50～80 cmの造成層が全体を覆っており、遺物の混入は認められなかった。II層は約10～20 cm、III層は約20～30 cmの層厚で、全体的に継りがやや弱い。

II・III層を切って構造遺構1条（SD1）が検出されたが、基盤層がやや軟質であったため、遺構上部の大半を掘削し、底面だけの残存を確認した。

本遺構は北北西から南南東方向に主軸があり、北側の深い谷に続いているように思われる。

残存部分の規模は上幅約120 cm、底面幅約100 cm、深さ9 cmの皿形を呈する。トレンチ南西壁断面の観察によると、本来は上幅150 cm以上、底面幅100 cm、深さ36 cm以上の逆台形を呈していたと考えられる。基盤層はII層中まで削平されているため、本来遺構の掘り込みはより深かったことが想定される。

2-4 トレンチ（第23図）

平坦な地形に2 m × 1.4 m（東側）、2 m × 1.4 m（西側）のトレンチ2ヶ所を設定した。標高は約99.2 mを測る。

厚さ約60～65 cmの造成層が全体を覆っており、遺物の混入は認められなかった。また、II層上面に遺構が確認できなかつたため、トレンチ全体を工事掘削深度である98.27 mの深さまで掘削した。繊層上面を確認するために一部分のみ20～30 cmほど掘り下げている。

II層は約10～20 cm、III層は約10 cm、IV層は約25～40 cmの層厚がある。東側・西側トレンチでのIV層底面では段丘繊層を検出した。2ヶ所とも段丘繊層を検出した。

2-5 トレンチ（第24図）

平坦な地形に2 m × 1.6 m（東側）、2 m × 1.6 m（西側）のトレンチ2ヶ所を設定した。標高は約99.3 mを測る。

厚さ約5～15 cmの造成層が全体を覆っており、遺物の混入は認められなかつた。また、II層上面に遺構が確認できなかつたため、トレンチ全体を工事掘削深度である98.45 mの深さまで掘削した。II層は10～35 cm、III層は25～45、IV層は20～40 cmの層厚がある。2-4トレンチではIII層をa、bに分層することができなかつたが、このトレンチでは分層が可能であった。IIIa層は10～25 cm、IIIb層は10～20 cmの層厚がある。IV層上面での勾配は殆ど認められず水平であるが、全体的に緩やかな波状を呈している。

2-6 トレンチ（第24図）

2-1 トレンチの6 m南側に、遺物が出土している範囲を中心に3 m × 3 mのトレンチを設定した。造成層の除

去をおこなっていたところ瓦片が出土したため、調査の対象となった。標高は 99.4 m を測る。

造成層を 5 cmほど掘り下げたところで、II 層を切る形で遺物を含む暗褐色土が広がる状況を確認した。少なくとも基盤層を掘り込んで構築された可能性が考えられたため、トレンチ内に II 層以下の堆積状況を確認するためにサブトレンチ 1ヶ所を設定し、確認面から約 75 cmまで掘削した。しかし II 層の下から、瓦片やガラス片を含む黒褐色土層が確認され、2-1 トレンチと同じ状況であることが把握できた。II 層と想定していた黄褐色土層は造成層に相当し、江戸時代以降に大規模な造成があったことが想定される。表面に見えていた遺物の出土状況を考慮すると、造成の段階でまとめて廃棄したと考えられる。

3-1 トレンチ（第 25 図）

野草園に通じる連絡園路の北側で、南西から北東へ下る斜面地に 21 m × 1 m のトレンチを設定した。標高はトレンチ南西側で約 99.6 m、北東側で約 97.6 m を測り、高低差は約 2 m である。現状での勾配は 9.5% である。

厚さ約 5 ~ 20 cm の造成層が全体を覆っており、遺物は混入していなかった。また、遺構も認められていない。

I 層の層厚は約 10 ~ 15 cm 程度であり、トレンチの北東角から 8 m 付近で確認できなくなる。II 層は約 10 cm、III 層は 10 cm 以上を測る。I 層と同様に 10.5 m 先からは II 層は検出できなかった。南西側では IV 層上面まで掘削深度が達していないため、層厚は明らかではない。IV 層は約 35 cm の層厚がある。トレンチ北東隅で埋設物の堆積土を除去したところ、段丘縁層が検出された。

3-2 トレンチ（第 26 図）

野草園に通じる連絡園路の南側で、南から北へ下る斜面地に 6.5 m × 1 m のトレンチを設定した。標高はトレンチ南側で約 101.0 m、北側で約 100.6 m を測り、高低差は約 0.4 m である。

厚さ約 20 ~ 30 cm の造成層が全体を覆っており、遺物はあまり混入していなかった。トレンチ西側中央部分に深い擾乱を受け、東側では配水管を入れるための擾乱が認められた。東西を擾乱に挟まれるような形で、上記の造成層とは性格の異なる整地層が 20 ~ 30 cm の厚さで残存していた。トレンチ南側の一帯で IV a 層と構造遺構 (SD 2) の立ち上がりを確認している。II・III 層は認められず IV 層の残存状況があまり良くないことから、SD 2 の上半部を削平している可能性が考えられる。SD 2 の底面は礫層を掘り込んでいる。

規模は、幅は約 260 cm を測り、深さは約 50 cm を測る。幅約 70 cm、深さ約 30 cm を呈するテラスが一段設けられている。遺構の断面形態は逆台形を呈す。

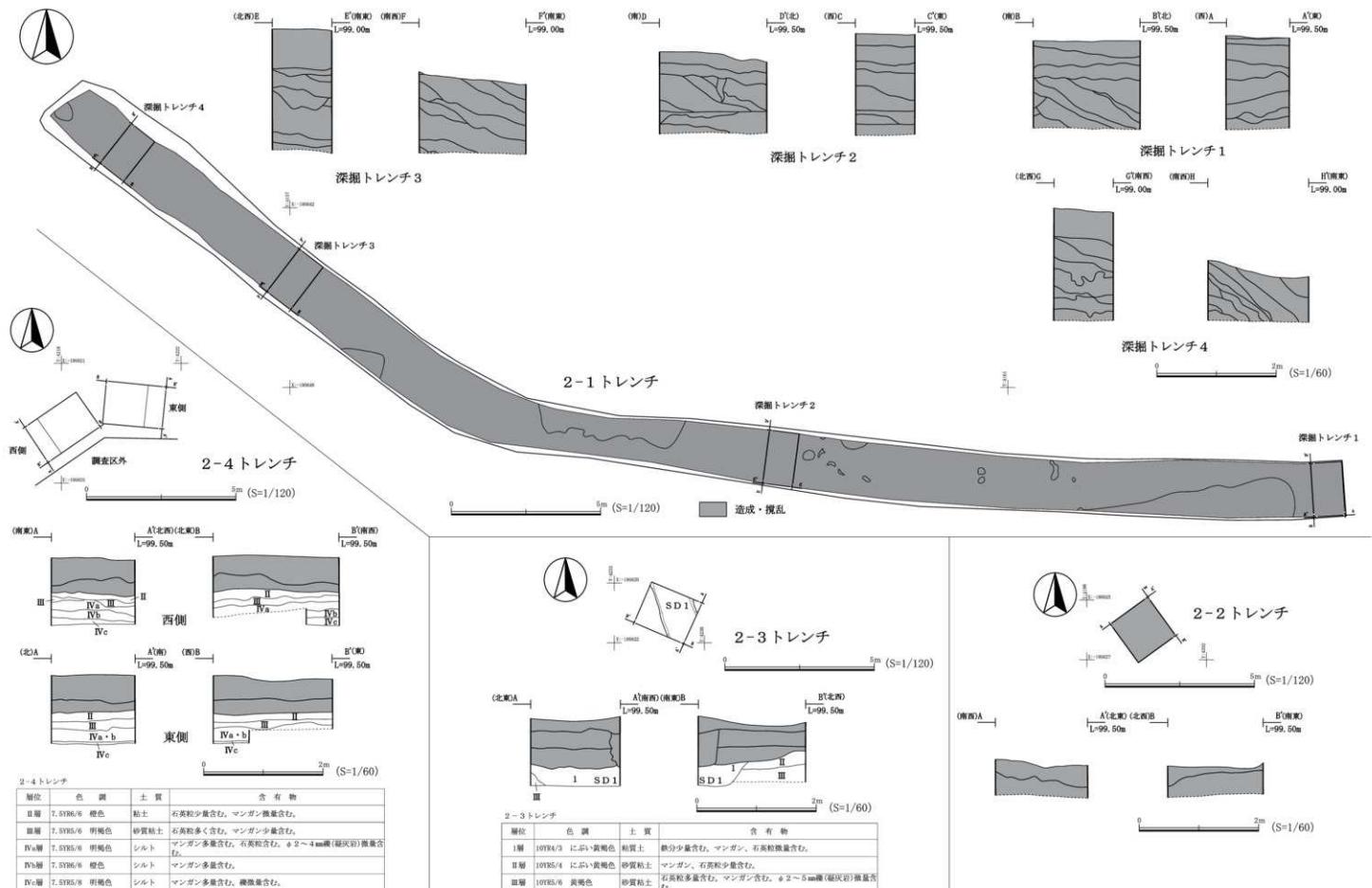
西側断面を見ると、SD 2 の堆積土を掘り込む形で 5・6 層が認められる。一度遺構が埋まった後、再び一部分を構として利用した可能性も考えられるが、東側断面で明確な掘り込みが確認できなかつたため不詳である。整地層、遺構堆積土からは多くの遺物が出土している。SD 2 の底面直上からも厚手の撲し瓦片が出土した。

4-1 トレンチ（第 27 図）

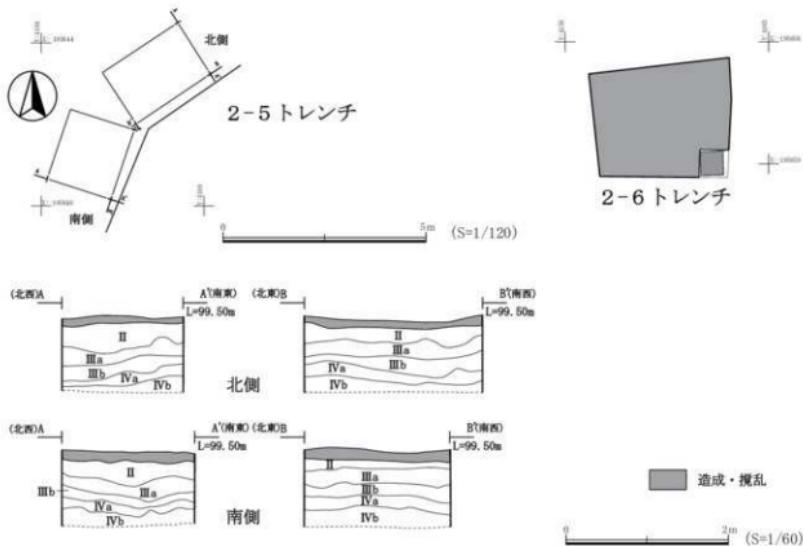
大年寺の山門へと下る道の部分で 4.2 m × 2.2 m のトレンチを設定した。標高は南西側で 98.9 m を測り、全体的に地形は、南東側に舌状に張り出す狭小の台地を呈する。

トレンチの北西側は公園整備により既に側溝が構築されているため、幅 80 cm 程は擾乱を受けていた。また、全体的に碎石による厚さ約 50 cm の碎石層に覆われ、遺構、遺物共に認められなかった。

基盤層は削平を受け、厚さ 5 ~ 15 cm の IV 層（1 トレンチの IV b 層に相当）のみが残存していた。IV 層の下から V 層（礫層）を検出した。



第23図 2-1・2・3・4トレンチ (S=1/120・1/60)



2-5 レンチ

層位	色調	土質	含有物
II層	7.5YSR5/6 明褐色	粘土	マンガン、石英粒含む。φ 2～5mmの砂(凝灰岩)少數含む。長石粒微量含む。
IIIa層	7.5YSR5/6 明褐色	砂質粘土	石英粒多量含む。φ 2～5mmの砂(凝灰岩)。マンガン含む。長石粒微量含む。
IIIb層	7.5YSR5/6 明褐色	砂質粘土	φ 2～10mmの砂(凝灰岩)IVa層との境に帯状に含む。石英粒含む。マンガン少數含む。長石粒微量含む。
IVa層	7.5YSR5/6 明褐色	シルト	石英粒微量含む。IIIb層との境にマンガン帶状に含む。
IVb層	7.5YR4/6 棕色	シルト	マンガン多く含む。

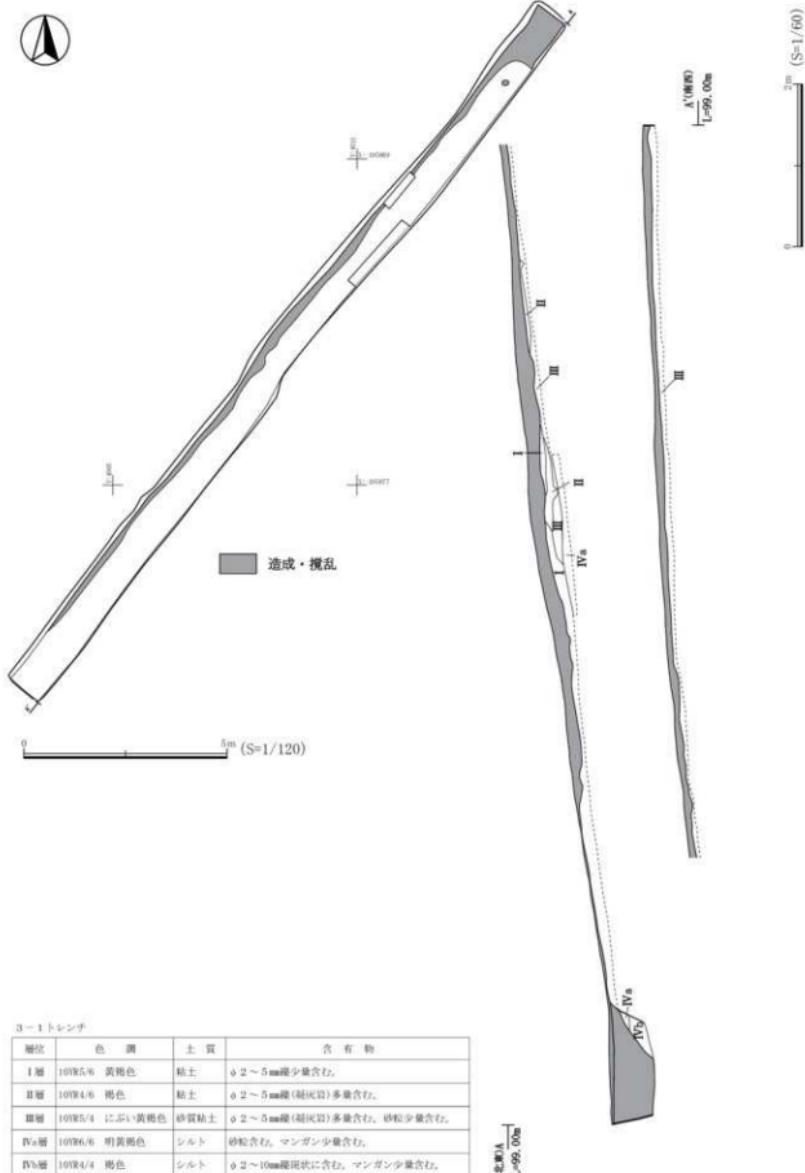
第24図 2-5・6 レンチ (S=1/120・60)

4-2 レンチ (第27図)

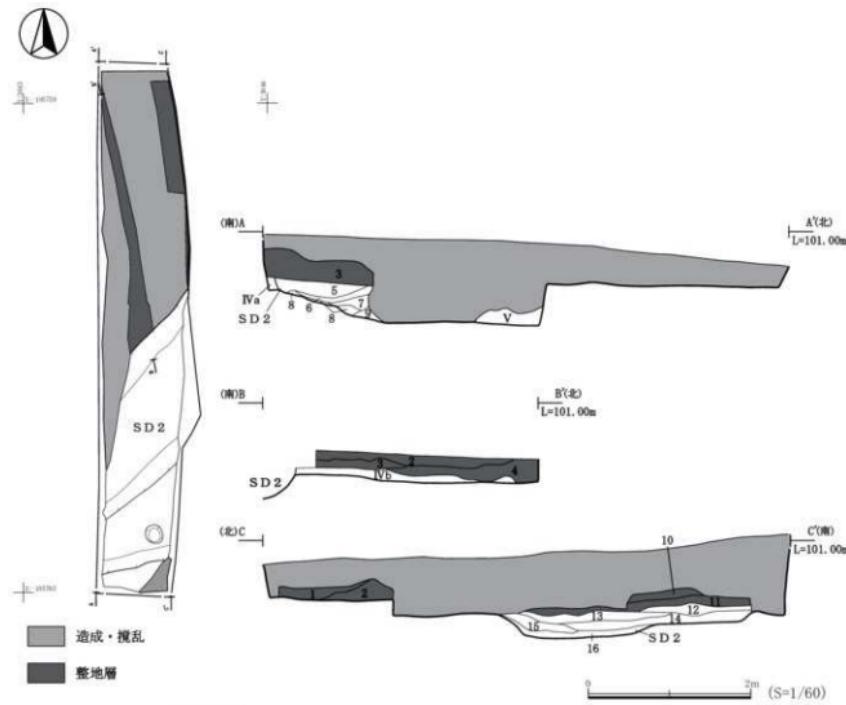
千人溜と称される平場（仙台市史編さん委員会 2006）から石段を上った場所に 2.3 m × 1 m のレンチを設定し、標高は約 95.1 m を測る。

階段部分から北西方向の緩やかな上り坂側に、直径 5 ~ 10 cm 円礫を含む碎石層が敷かれており、碎石層を除去すると II 層が認められた。しかし、2-4・5 レンチで確認された II 層よりも繊りは弱く、全体的に茶色味を帯び、礫の混入が多い様子が見受けられた。北西側断面を見ると、碎石層が II 層中に落ち込む様子が確認された。

やや軟質な II 層を掘削していくと、北東側に III 層を直線的に切る形で II 層が入り込んでいる様子が確認できた。地層の面的な状況や土質を勘案すると、II 層・III 層としていたものは基盤層ではなく、周辺の整備に伴い実施された造成層の可能性が非常に高い。また、II 層中の落ち込みは碎石層と敷石の継ぎと考えられ、近代に入ってからのものである。



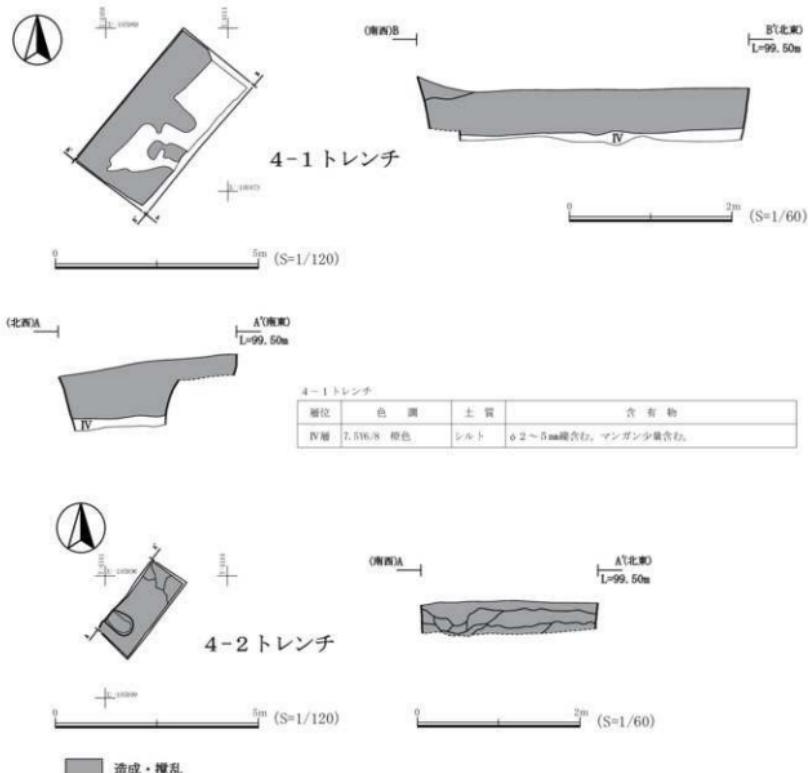
第25図 3-1 トレンチ (S=1/120・1/60)



3-2 トレンチ

層位	色 調	土 質	含 有 物
1層	7. STR5/6 明褐色	粘土	明黄褐色粘土ブロック、暗褐色粘土ブロック多量含む。φ 5 ~ 10mm礫多量含む。
2層	7. STR4/4 棕色	粘土	明黄褐色粘土ブロック少量含む。マンガン含む。φ 0.5mm礫少量含む。
3層	7. STR3/3 棕色	粘土	灰褐色粘土ブロック。黒褐色粘土ブロックが2層との境界に含む。マンガニ含む。φ 0.5mm礫少量含む。鐵土鉱微量含む。
4層	7. STR3/9 明褐色	砂質粘土	黄褐色粘土ブロック。マンガニ含む。φ 5 ~ 10mm礫少量含む。
5層	7. STR3/3 嗜褐色	粘土	褐色粘土ブロック。マンガニ含む。鐵土鉱微量含む。
6層	7. STR4/4 棕色	粘土	明黄褐色粘土多く含む。マンガニ含む。鐵土鉱少量含む。炭化物微量含む。
7層	7. STR3/4 嗜褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック斑状に含む。マンガニ含む。炭化物微量含む。
8層	7. STR3/3 嗜褐色	粘土	暗褐色粘土多く含む。φ 1mm礫少量含む。鉄物含む。
9層	10TR6/6 明黃褐色	粘土	褐色粘土ブロック。φ 50 ~ 100mm礫含む。
10層	7. STR3/3 嗜褐色	粘土	褐色粘土ブロック。黃褐色粘土ブロック含む。φ 5 ~ 10mm礫少量含む。
11層	7. STR4/4 棕色	粘土	暗褐色粘土ブロック。黃褐色粘土ブロック含む。φ 2 ~ 7mm礫少量含む。
12層	7. STR4/4 棕色	粘土	暗褐色粘土ブロック含む。炭化物、鐵土鉱微量含む。
13層	7. STR3/4 嗜褐色	粘土	明黄褐色粘土ブロック少量含む。炭化物微量含む。
14層	7. STR3/3 嗜褐色	粘土	明黄褐色粘土ブロック含む。炭化物微量含む。
15層	7. STR6/6 棕色	粘土	明褐色粘土ブロック。炭化物微量含む。
16層	7. STR6/6 棕色	砂質粘土	φ 2 ~ 5mm礫多量含む。暗褐色粘土ブロック含む。
IVa層	10TR6/6 明黃褐色	シルト	φ 0 ~ 10mm礫。マンガニ。石英鉱微量含む。
IVb層	7. STR6/6 棕色	シルト	φ 10 ~ 50mm礫多量含む。地山。
V層	5TR5/6 棕色	砂礫	φ 10 ~ 50mm礫多く含む。砂粒微量含む。

第26図 3-2 トレンチ (S=1/60)



第27図 4-1・2トレンチ (S=1/120・1/60)

第2節 遺構外出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は瓦が最も多く、総点数2,317点、総重量307,665gが出土しており、近世・近代の陶器類は総点数188点、総重量29,893gが出土している。また、石製品も1点(8,590g)出土した。

瓦については前年度の分類基準を踏襲し、I群(焼し瓦)とII群(陶器瓦)に分類した。今回出土した遺物は、焼し瓦と陶器瓦であった。焼し瓦のなかには、全体的に薄手で、凹凸面と小口の調整が丁寧におこなわれ、面取りが施されているものもある。出土した瓦は、種類ごとに分類し集計をおこなった(表3)。

軒丸瓦や軒平瓦など瓦当部を持つ瓦類の出土が少なく、全体の2.5%(59点)であった。軒丸瓦では、堅三引両文が割合として多い。そのなかには、牡丹や鶯鶯など伊達家に由来する家紋も認められ、1点若しくは2点出土している。また、三つ葉葵文の瓦当部を持つ軒丸瓦も出土した。丸瓦・平瓦の凸面には、側面に刻印が押されているものも認められる。

陶器類の出土量は、瓦片に比べると1割にも満たない程度であり、そのほとんどが2-1トレンチから出土している(表1)。I群瓦が多く出土した3-2トレンチからは、6点のみの出土にとどまった。

近世の遺物として磁器が出土している。肥前と瀬戸・美濃に占められるが、相対的に肥前磁器の割合が多い。肥

前磁器のもので18世紀代に位置付けられる遺物が認められる。以下から出土遺物の説明をおこなう。

1は肥前の磁器で器種は小碗、端反形である。外面に風景文の染付を描く。見込に岩波文が認められる。製作年代は1810～1860年代である。

2は瀬戸・美濃の磁器で器種は小碗、端反形である。外面に松と梅を交互に染め付けている。見込に二重圓線内に花卉を描く。製作年代は1810～1860年代である。

3は肥前の磁器で、器種は中碗である。外面に風景文の染付を描く。高台に二重圓線、高台内部に一重圓線を描く。年代は1650年代～1690年代と思われる。

4はII群の軒丸瓦である。瓦当部には三つ葉葵文が認められる。凸面は並行する連続の縱方向のナデ、凹面には鉄線切り痕（コビキB技法）が浅く認められ、布目痕が残存する。瓦当部裏面上半部に丸瓦を当て、凹面に粘土を付加する。接合部にはキザミを付け強度を増し、横方向のナデによる調整を施す。残存箇所は部分的であるが、表裏全体に厚く釉が掛けられている。

5はI群の軒丸瓦である。瓦当部には鷺鶴丸文の羽の一部と思われる部分が認められる。右側外縁部のみの残存である。裏面には丸瓦を当て粘土を付加した一部が残存する。側面は横方向のナデ、裏面は斜め方向のナデが施される。推定径は13cmを測る。

6はII群の軒平瓦である。瓦当部の中心飾りに三引両文を配し、両側に陸線唐草文を一対配する。唐草文の先端部分は細く上方に伸び上がるモチーフである。平瓦部凸面は縱方向のナデ、凹面は横方向のナデを施す。瓦当部との接合部分には横方向のナデが認められる。瓦当部裏面上半部に平瓦を当て、凹面に粘土を厚く付加し横方向のナデを施す。

7はII群の軒平瓦である。瓦当部の中心飾りに三引両文を配し、両側に内向する飛雲唐草文を一対配する。平瓦部凸面及び凹面は横方向のナデによる調整が施される。瓦当部裏面上半部に平瓦を当て、凹面に粘土を厚く付加し横方向のナデを施す。瓦当部表面上端には面取りが施されている。

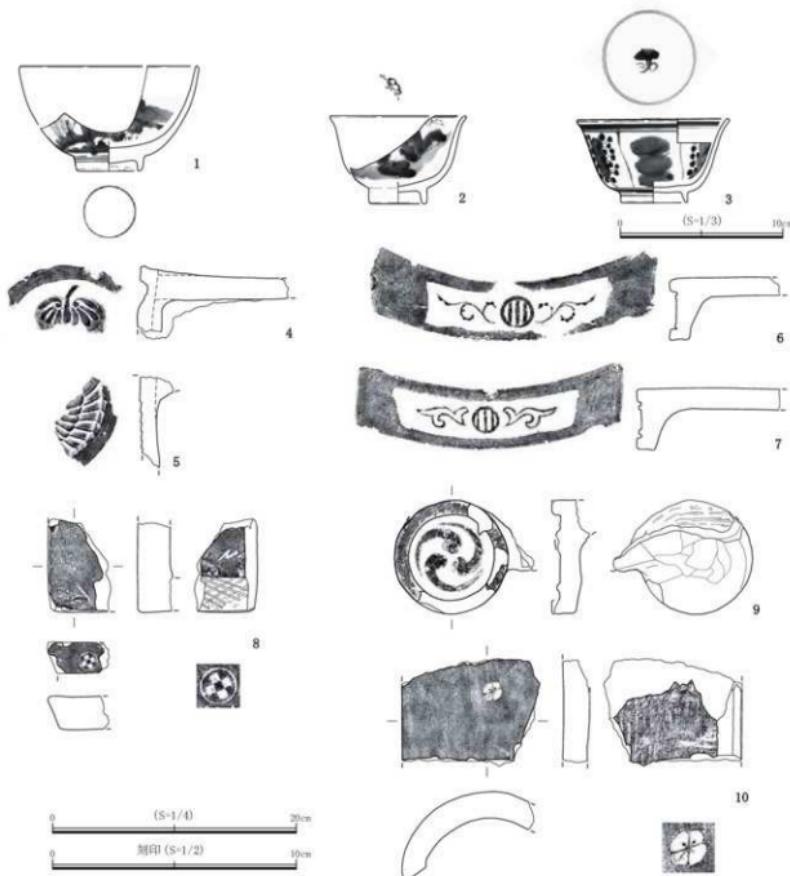
8はI群の軒平瓦である。瓦当部は残存しないが、凹面にキザミのある剥落部分が認められる。瓦当部は頸貼り付けと考えられる。瓦当部裏相当部分には粘土を当て横に撫で付けている。残存部分では平瓦部分の反返りがなく平である。凸面は縱方向のナデを施した後に横方向のナデをおこなっている。凹面は縱・横にナデを施す。瓦当部側に丸に四つ石の刻印が認められる。

9はI群の軒棧瓦の小巴の部分である。瓦当部には右回り三巴文が認められる。頭部は互いに近く、尾は長く近接している。瓦当部側縁には横方向のナデを廻らせている。瓦当部裏面上半部に棧瓦を当て、凹面に粘土を付加する。中央部はヘラによる撫で付けをおこない、周縁にはナデを廻らす。接合部にはキザミを付け強度を増している。

10はI群の丸瓦と思われる。玉縁・小口の両側が折損している。凸面には連続する縱方向のナデが認められる。部分的に光沢が観察できるため、ミガキを施している可能性がある。凹面は布目痕と離れ砂が認められる。一部に深い横方向の削りを施した後に斜め方向のナデを施している。凸面の中央部分に木瓜もしくは花菱の刻印が押されている。

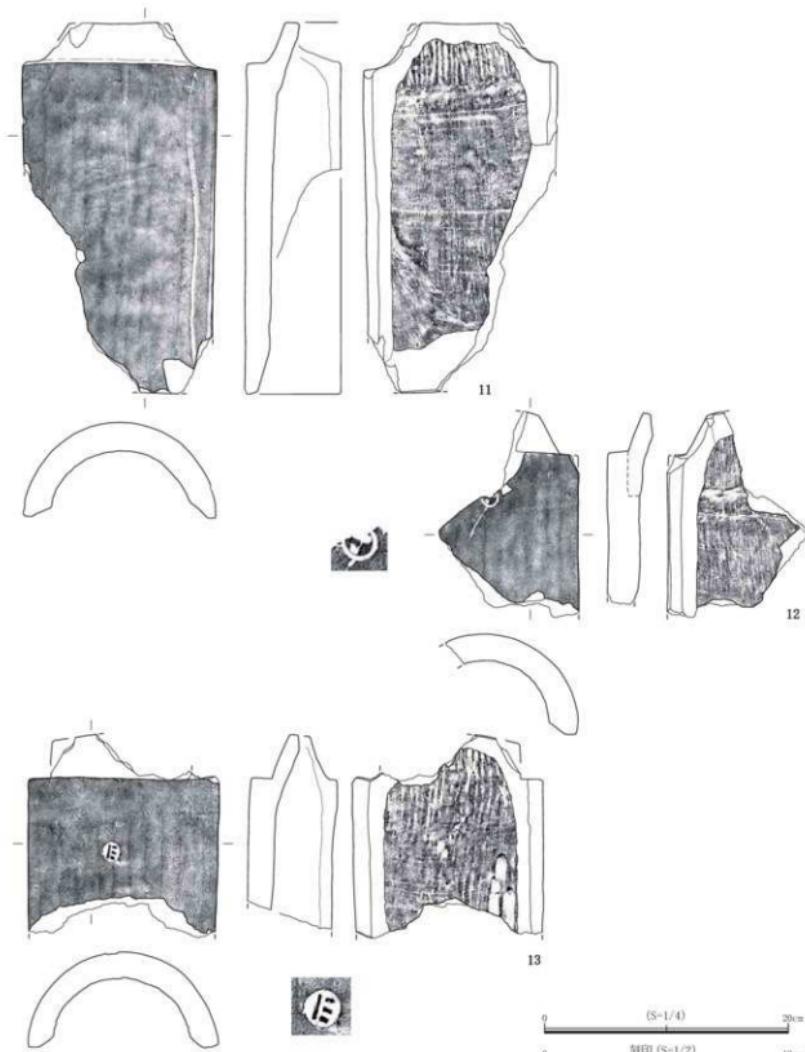
11はI群の丸瓦である。丸瓦の長さが分かる唯一の資料である。凸面は玉縁側に横方向のナデが認められ、その後に連続する縱方向のナデが施される。残存する調整からの判断となるが、部分的に横方向のナデを施したのではなく、全体的に横方向のナデから縱方向のナデという調整をおこなったと思われる。凹面には鉄線切り痕（コビキB技法）が観察される。布目痕、若干の離れ砂が認められ、横方向のナデが施される。粘土積痕が約5cmの幅で認められる。玉縁の接合部分は先端から約5cmのところに痕跡がある。小口は縱・横方向のナデが施される。

12はI群の丸瓦である。凸面は横方向のナデを施した後、連続する縱方向のナデを施す。右側縁側に当て布もしくは刷毛状工具を使用した痕跡が認められる。凹面には鉄線切り痕（コビキB技法）と布目痕が残存し、玉縁の接合部より下方を浅い横方向のナデによる調整を施す。玉縁の接合部分は先端から約7cmのところに痕跡がある。



補圖番号	調査区・出土場	製作地	器種	様式・形式	装飾	器高・長 mm	口径・幅 mm	底径・厚 mm	備考	写真番号
第28図-1	2-1T・造成層	把所	中盤	透明釉		65	168	37	外面風景文/高台二重圓縁/高台内一重圓縁	12-1
第28図-2	2-1T・造成層	把所	小盤	端反形	透明釉	54	82	32	外面風景文/見达苔波文	12-2
第28図-3	3-2T・造成層	美濃	小盤	端反形	透明釉	52	92	40	外面松梅文/見达二重圓縁/花卉文	12-3
補圖番号	調査区・出土場	器種	全長 mm	幅 mm	厚さ mm	瓦当径 mm	瓦当長(斜平)	瓦当厚(斜平)	備考	写真番号
第28図-4	2-1T・造成層	軒瓦	(28)	(50)	—	(130)	16			12-4
第28図-5	2-1T・造成層	軒瓦	(124)	(118)	18	(140)	20			12-5
第28図-6	2-1T・造成層	軒瓦	(92)	240	15		49	17		12-6
第28図-7	2-1T・造成層	軒瓦	(117)	222	18		50	16		12-7
第28図-8	3-2T・整地層	軒瓦	(77)	(50)	21				接合部外丸/ヰ半E残存/刻印	12-8
第28図-9	2-1T・造成層	棟瓦	(31)	(114)	—	95	15		接合部牛字半E残存	12-9
第28図-10	3-2T・整地層	丸瓦	(80)	(113)	22				刻印	12-10

第28図 遺構外出土遺物（1）



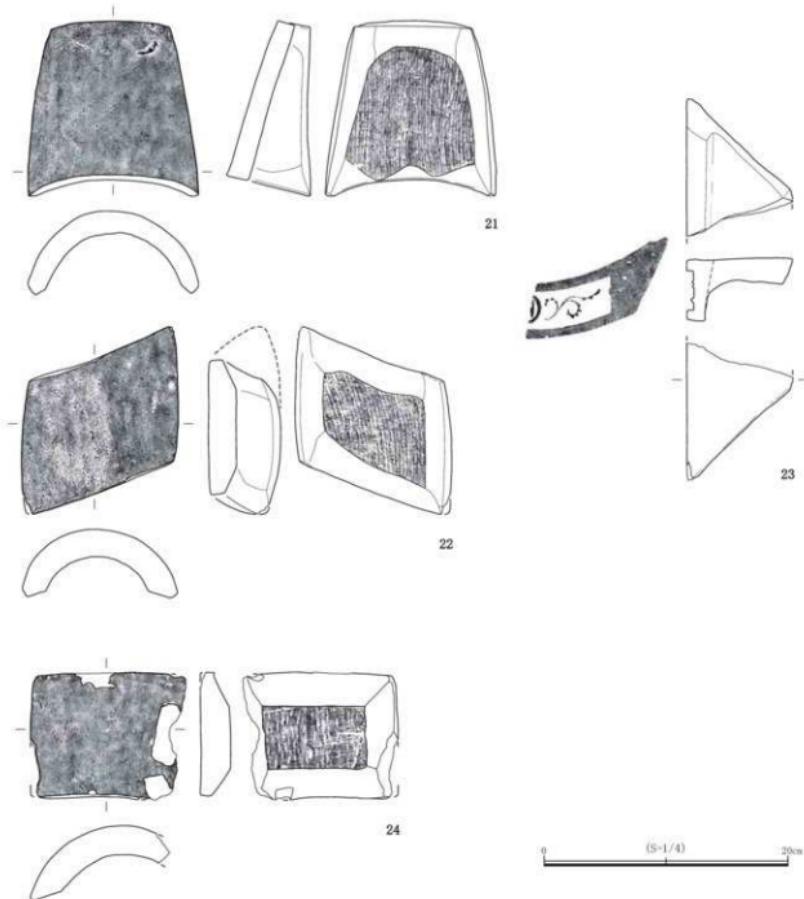
標識番号	調査区・出土場	器種	全長 mm	幅 mm	厚さ mm	瓦当径 mm	瓦当形(軒丸)	瓦当長(軒平)	瓦当厚(軒平)	備考	写真番号
第2958-11	3-2T・整地層	丸瓦	330	161	24					瓦縫長: 34mm	12-11
第2958-12	3-2T・整地層	丸瓦	(169)	(115)	23					瓦縫長: 34mm / 刻印	12-14
第2958-13	3-2T・整地層	丸瓦	(167)	(157)	21					瓦縫長: 36mm / 刻印	12-17

第29図 遺構外出土遺物（2）



神面番号	測量区・出土層	器種	全長 mm	幅 mm	厚さ mm	瓦当径 mm	瓦当厚(軒丸)	瓦当長(軒平)	瓦当幅(軒平)	備考	写真番号
第30図-14	3-2T・壁地層	丸瓦	(91)	(88)	27					刻印	12-12
第30図-15	3-2T・壁地層	丸瓦	(99)	(78)	21					刻印	12-13
第30図-16	2-6T・造成層	平瓦	230	(123)	19						13-18
第30図-17	3-2T・壁地層	平瓦	(110)	(107)	24					刻印	12-15
第30図-18	3-2T・壁地層	平瓦	(88)	(123)	24					刻印	12-16
第30図-19	2-6T・造成層	菊丸瓦	(24)	-	-	105	22			接合部外れ/半サミ残存	13-19
第30図-20	2-6T・造成層	菊丸瓦	(30)	-	-	90	17			裏面棒状部分折損	13-20

第30図 遺構外出土遺物（3）

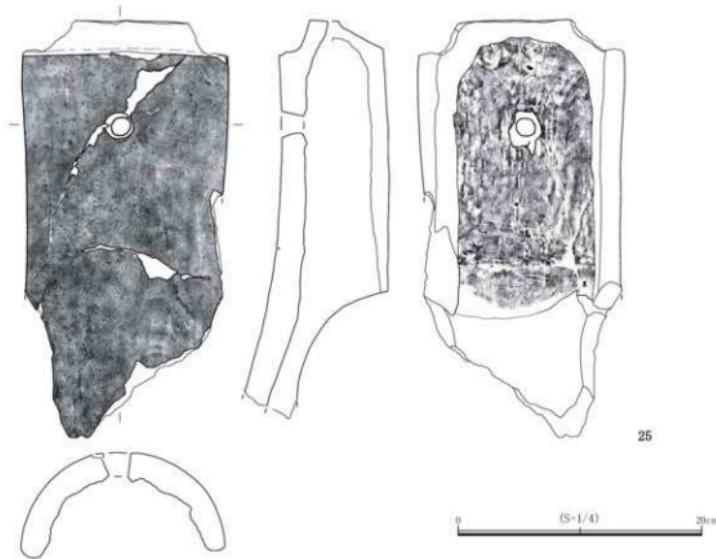


第31図 遺構外出土遺物（4）

凸面に半分ほど欠損した刻印が認められる。推測であるが、22の丸に漢数字の「八」に類似する。全体的に作り・整形は丁寧におこなわれている。

13はI群の丸瓦である。1/2程度が残存する。凸面は連続する縦方向のナデが施される。丸瓦の玉縁側は横方向のナデが認められる。凹面には鉛線切り痕（コピキB技法）が観察され、布目痕と離れ砂が認められる。浅い横方向のナデが施される。右側に棒状工具を用いた連続する刺突の痕が残存する。玉縁の接合部は丁寧に整形され、

標識番号	調査区・出土層	器種	全長 mm	幅 mm	厚さ mm	瓦当径 mm	瓦当厚(軒丸)	瓦当長(軒平)	瓦当厚(軒平)	備考	写真番号
第31図-21	2-1T・造成層	輪ぬい	144	140	18						13-22
第31図-22	2-1T・造成層	面戸瓦	155	129	22						13-23
第31図-23	2-6T・造成層	輪軒平瓦	(88)	(113)	21			47	17		13-24
第31図-24	3-2T・整地層	面戸瓦	105	(127)	24						13-21



第32図 遺構外出土遺物（5）

接合部痕跡が消されている。玉縁は横方向のナデが施される。凸面の玉縁側に縱棒に三の様な刻印が認められる。

14はⅠ群の丸瓦と思われる。玉縁側の一部が残存するのみである。凸面は連続する縱方向のナデが認められ、凹面には鉄線切り痕（コビキB技法）が見られ、布目痕を横方向のナデで消しているようだが、大部分が残存する。凸面には木瓜もしくは花菱の刻印が認められる。第30図-14の刻印と同類のものと思われるが、木瓜もしくは花菱を刻印した後に菱形のものを中央に深く押し込んでいる。

15はⅠ群の丸瓦である。凸面には連続する縱方向のナデが認められ、玉縁側に横方向のナデが施される。凹面には鉄線切り痕（コビキB技法）と思われる痕跡があり、布目痕が残存する。離れ砂が残るために、横方向のナデにより撫で消していたと思われる。破断面を観察すると玉縁を本体に貼り付けた様子が窺え、貼り付け部分が肥厚している。凸面に長方形に一と二重丸の刻印が認められる。

16はⅡ群の平瓦である。平瓦の長さが分かる唯一の資料である。凸面は縱方向のナデの後に横方向のナデを施す。凹面は横方向のナデの後に縱方向のナデを施す。両面とも調整の痕跡が明確ではないため、粘土を薄く延ばしている（化粧粘土）。凸面に離れ砂と思われる痕跡が認められる。4～5cm幅の帯状粘土を貼り付け作り上げている。

17はⅠ群の平瓦である。凸面は横方向のナデによる調整が認められるが、部分的に離れ砂が残る。凹面は不定方向のナデが施されているが粗雑である。離れ砂が多く残る。前面に丸に反り亀甲と丸の刻印が認められる。全体的に白色化し歪みが認められることから、二次焼成を受けた可能性が考えられる。

18はⅠ群の平瓦である。凸面は横方向のナデが認められ、凹面は横方向のナデの後に縱方向のナデを施す。前面に丸に漢数字の「八」を思わせる刻印が押されている。

19はⅡ群の菊丸瓦である。瓦当部には牡丹文が認められる。側面には削りのような線状痕が認められ、その後

に横方向のナデが施されると思われる。裏面では縁に沿ってナデが施される。棹部との接合部分は剥落し、強度を増すための横方向のキザミが見られる。周囲に粘土を当て撫で付けている。

20はII群の菊丸瓦である。瓦当部には堅三引両文が認められる。全体に軸が厚く掛けられているため、調整などは不明瞭である。裏面に棹状の部材が一部残存するが、途中にて折損する。接合部には厚く粘土が付加されている。

21はII群の輪違いである。凸面は連続する縦方向のナデ、凹面には鉄線切り痕(コビキB技法)の痕跡が浅く残り、布目痕が残存する。縁部分には縦・横方向の削りの調整が施される。両端の小口は平に整形されている。両側縁も面取りがおこなわれている。全体的に丁寧な仕上がりとなっている。前方部に弧状の溶着痕が認められる。

22は上下両端を斜位に落とした、II群の面戸瓦である。厚い軸が掛けられているが、凸面には連続する縦方向のナデが認められる。凹面の中央部分には布目痕が見られる。縁には丁寧なヘラ削りが施される。凹面には鉄線切り痕(コビキB技法)及び、均整する布目痕が見られる。大部分に軸は認められない。両端の木口部分や両側縁の面取り部分の調整なども丁寧におこなわれている。

23はII群の隅軒平瓦である。瓦当部の中央部分に三引両文を配し、右側に降線唐草文を配する。唐草文の先端部分は第28図-6の文様に比べ伸びが鈍くなる。また、文様の棱線がシャープであり立体的に映る。瓦当部との接合部分には粘土を厚く付加し、凹面・凸面共に横方向のナデにより強く撫で付けている。観察される割れ口にはキザミは認められない。厚い軸が掛けられ、面取りや稜の仕上げなどを見ると、全体的に丁寧な作りである。

24はI群の面戸瓦である。凸面は縦方向のナデの後に浅い横方向のナデが施されている。凹面には鉄線切り痕(コビキB技法)が見られ、布目痕を浅い横方向のナデで消しているが、十分に消しきれていない。凹面の小口の削りは比較的丁寧におこなわれている。

25はII群の鳥伏間瓦である。厚い軸が凸面を覆うが、連続する縦方向のナデが認められる。凹面の丸瓦部分については布目痕が見られる。玉縁側と側縁には明瞭な削りの痕が認められる。瓦当部側の反り上がる部分では、縦・横のナデが施されている。玉縁の接合部分は先端から約5cmのところに痕跡がある。玉縁側に焼成前穿孔が1ヶ所認められる。

表1 2年次陶磁器組成表

上段:点数、下段:重量:g(グラム)

	近世				近代				その他	合計
	磁器	陶器	炻器	土器	磁器	陶器	炻器	土器		
2-1T	47	24	10	12	33	28	15	9	3	181
	1121	985	3244	3923	2519	2467	6259	350	8823	29691
2-6T				1						1
				4						4
3-2T	5		1							6
	159		39							198
合計	52	24	11	13	33	28	15	9	3	188
	1280	985	3283	3927	2519	2467	6259	350	8823	29893

第4章　まとめ

今回の調査では茂ヶ崎城に関わる遺構や遺物は確認されなかったが、大年寺に関連する遺構・遺物が検出された。その詳細については第2章、第3章で報告しているが、若干の所見を記し、まとめとしたい。

1. SK2土坑について

1次調査の2トレンチで確認された土葬甕棺墓である。棺に用いられた甕は、全面に鉄軸がかけられ、内側へ折れる口縁部や胴部に凸帯の巡る特徴的な器形をもち、格子目文の叩き當て具痕を内面に残すことから、唐津焼と判断される。唐津焼の甕は17世紀前半に叩きの當て具痕が同心円文から格子目文へ移行し、17世紀後半には全て格子目文となる。口縁部形態は、17世紀代は内側へ折れ強く突出するものが多いが、18世紀代になると内側への突出は弱くなるか、肥厚して玉縁状の口縁となる（東中川2001）。したがって、この甕の時期は17世紀代後半頃に位置づけられる。また、唐津焼は近世初期から東廻り海運に乗って仙台周辺まで流通し盛んに消費されるが、18世紀後半には減少することが知られている（仙台市史編さん委員会2004）。一方、副葬された錢貨3点はいずれも寛永通寶で、1点は古寛永、1点は「不旧手」に分類される新寛永であり、新寛永は1700年前後の鑄造とされている（篠ハドソンほか1998、江戸遺跡研究会編2001）。残る1点は欠損により古、新的の判別は困難である。

以上、甕棺と副葬された錢貨および仙台における唐津焼の流通時期から、本甕棺墓の時期は18世紀前半頃と推定される。

仙台市内では、正徳元年（1711）に没した伊達家3代藩主伊達綱宗が常滑の甕棺に埋葬されており、同甕は常滑大甕のこの時期の基準資料となっている（江戸遺跡研究会編2001）。また、青葉区北根に所在する新妻家墓地では甕棺5基が検出されており、墓石の銘文によって明和7年（1770）～慶応2年（1866）の年代が明らかである。用いられている甕は、いずれも堤焼であった（仙台市教育委員会1986、仙台市史編さん委員会2005）。さらに、本調査地点に近い野草館の改築に伴う茂ヶ崎城跡第1次調査では、甕棺を木箱に入れて埋葬した19世紀中頃の木桶甕棺墓が発見されており（仙台市教育委員会2008）、この甕も堤焼である。

江戸では甕棺として一般的に用いられるのは常滑大甕であるが、仙台市内で確認された甕棺の多くには以上のように堤焼の製品が用いられている。堤焼は19世紀代に盛んに生産されるようになる。仙台市内では18世紀後半に唐津焼や漸戸・美濃の陶器が減少し、大堀相馬焼がそれに代わっており（仙台市史編さん委員会2004）、このような陶器生産、流通の時代的背景を反映しているものと考えられる。

今回検出された甕棺墓の被葬者は、第2章第3節に詳述したように20～30歳代の女性である。SK2土坑が検出された2トレンチは、後述のように伊達家の墓所区画付近に位置している。また、甕棺墓は江戸では旗本や藩士の墓とされており、被葬者はその階層に属していたものと考えられることから、伊達家に連なる、もしくは所縁のある女性であったと考えられる。

2. 瓦について

1・2年次の調査を通して最も多く出土しているのは瓦である。軒丸瓦には堅三引両文はじめ九曜文や牡丹文など、伊達氏の家紋として用いられた文様がみられ、伊達家の菩提寺として建立された大年寺の性格をよく示している。また、伊達家の家紋が多くを占める中、三つ葉葵の軒丸瓦も出土している。

出土した瓦は第2章第2節の遺構外出土遺物で触れたように、焼し瓦（I群）と陶器瓦（II群）に大別され、さらに焼し瓦には厚手と薄手がある。それぞれ軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦などで構成され、道具瓦もみられる事から、本瓦葺の建造物が付近に存在したことが知られる。いずれも表土・造成層出土のものであるが、各トレンチ・種類毎の出土点数・出土重量を表2・3に示した。

厚手焼し瓦

昭和 60 年の大年寺懸門解体修復工事に伴う発掘調査では厚手の焼し瓦が出土しており、軒丸瓦には面径の違う堅三引両文数種が確認されている（仙台市教育委員会 1987）。1 年次の調査では同様の堅三引両文 3 点のほか、九曜文とみられるもの 1 点が出土している（第 18 図-3・4）。堅三引両文は、3 点中 2 点が面径のやや大きいもの、1 点が小さく瓦当部の堅三引両文が細いものである。2 年次の調査では堅三引両文が 2 点あり、面径はともに 17 cm と大きく、堅三引両文の幅は 1.8 cm と 1.9 cm である。

軒平瓦の文様は凸線で表現された中心飾の左右に飛雲唐草文あるいは降線唐草文を 1 単位ずつ配した均整唐草文である。修復工事に伴う調査報告では、出土軒平瓦を中心飾の特徴から「三枚笠」：I 類、「梅花」：II 類、「三引両文」：III 類に分類し、I 類はさらに三枚笠や唐草文の形態から 3 タイプに細分している。

1 年次調査出土資料では III 類にあたる第 18 図-9 の 1 点のみである。第 18 図-8 は I 類-2 に類似するが、中心飾の三枚笠の上に雪を表現した波状凸線が認められる。2 年次の調査では瓦当部の一部が残存するのみで、文様が明らかなものは確認されなかった。それとは別に降線唐草文と飛雲唐草文を配した軒棟瓦が 2 点出土している。中心飾は残されていないが、唐草文の形態は、前者は III 類、後者は II 類に相当する。

薄手焼し瓦

瓦当部のある瓦は少なく、軒丸瓦 2 点、軒平瓦 3 点のみである。軒丸瓦の瓦当部は、瓦当面の文様の痕跡を残しておらず、鶯鳩丸文・九曜文と推定される。表 3 を見ると、薄手焼し瓦は厚手焼し瓦や陶器瓦に比べ、棟瓦が多く出土している。

陶器瓦

1 年次の調査で出土した軒丸瓦 12 点中の 10 点は堅三引両文（第 18 図-1）で、他に牡丹文とみられるもの（第 18 図-2）が 2 点ある。2 年次の調査では面径が分かれるものが 26 点認められ、牡丹文の 1 点を除き全て堅三引両文である。面径は 13 cm から 18 cm までの大きさであり、14 cm のものが最も多く（14 点）、15 cm のもの（6 点）がそれに次いでいる。その他に菊丸瓦が 4 点出土している。4 点中 3 点は堅三引両文（第 30 図-20）であり、1 点

表 2 1 年次瓦集計表

重量:g(グラム)													
	1T	2T	3T	4T	5T	6T	7T	8T	9T	10T	11T	合計	
I 群	丸瓦	点数	1	37			11	145	2	1		374	
		重量	60	2730			1160	1320	360	130		19690	
	平瓦	点数		52			16	1	142	3		211	
		重量		8500			1600	340	1110	140		22100	
	軒丸瓦	点数					2						
		重量					420		260			690	
	軒平瓦	点数		1					11			1	
		重量		240					1450			1650	
	鬼瓦	点数		1					1			1	
		重量		620					460			1080	
II 群	面戸瓦	点数											
		重量											
	隅切瓦	点数											
		重量											
	不明	点数		3				37		4		44	
		重量		280				280		290		1850	
	棟瓦	点数					2					436	
		重量					430						
	丸瓦	点数	1	44	43	1	3	1	3	3	1	301	
		重量	200	10315	6100	340	170	1030	100	260	460	65	19040
II 群	平瓦	点数	112	67	9	1	1	5	8	2	205		
		重量	26380	8000	720	60	85	1110	1360	290		38065	
	軒丸瓦	点数	12	5					1				
		重量	4330	900					780			5630	
	軒平瓦	点数	3	1								4	
		重量	1030	40								1070	
	鬼瓦	点数	1	1	1							1870	
		重量	530	1340									
	面戸瓦	点数	1	1						1	1	1	
		重量	160	190						420	510	1080	
その他	隅切瓦	点数	1									1	
		重量	500									500	
	点数	1										1	
		重量	170									170	
合計		点数	2	248	119	2	61	2	39	7	11	4	
		重量	260	4625	15830	1680	420	170	2980	263	2240	635	11500

表3 2年次瓦集計表

		2-1T	2-6T	3-2T	合計	重量:g(グラム)
I群 厚手	丸瓦	点数 重量	1 210	1 1895	1 19245	74
	平瓦	点数 重量	9 2840	2 38150	2 40900	365
	軒丸瓦	点数 重量	2 100	2 820	2 800	2
	軒平瓦	点数 重量	1 75	1 120	1 195	2
	軒桟瓦	点数 重量	2 980	2 980	2 980	2
	面戸瓦	点数 重量	3 100	3 100	3 100	3
	その他	点数 重量	8 45	8 45	8 45	8
	丸瓦	点数 重量	16 2120	1 425	1 2555	17
	平瓦	点数 重量	47 5015	16 1065	4 150	367
	軒丸瓦	点数 重量	1 70	1 20	1 90	1
I群 薄手	軒平瓦	点数 重量	2 205	2 205	2 205	2
	窓瓦	点数 重量	1 1140	1 1140	1 1140	1
	面戸瓦	点数 重量	1 160	1 160	1 160	1
	伏間瓦	点数 重量	9 3700	9 3700	9 3700	9
	桟瓦	点数 重量	25 1145	1 145	2 145	2
	軒瓦	点数 重量	50 6685	1 6685	50 6685	50
	丸瓦	点数 重量	353 31940	174 22605	130 130	528 54675
	平瓦	点数 重量	318 3135	263 37365	41 37365	6441
	軒丸瓦	点数 重量	15 3345	15 6300	21 36	36
	軒平瓦	点数 重量	4 2195	4 590	2 2785	8
II群	面戸瓦	点数 重量	2 2360	1 1170	2 1170	2
	伏間瓦	点数 重量	2 765	2 765	2 765	2
	その他	点数 重量	13 1105	9 1650	22 5845	22
	合計	点数 重量	1472 156420	344 156420	311 66640	331 307465

は牡丹文（第30図-19）である。

軒平瓦の文様は中心飾を堅三引両文とし、その左右に飛雲唐草文を配した均整唐草文である（第18図-6・7、第28図-7）。1年次で4点、2年次で1点出土しているが、同范の可能性がある。なお飛雲唐草文は、厚手焼し瓦のII類の唐草文と同じ图案が用いられている。三引両文と飛雲唐草文の組み合わせは惣門修复工事に伴う調査では認められない。その他に、III類が5点確認され（第28図-6、第31図-23）、中央飾は欠損しているが、隆線唐草文と判断できるものが2点ある。

厚手焼し瓦と陶器瓦の軒丸瓦についてまとめてみると、厚手焼し瓦では6点中5点が堅三引両文であり、1点が九曜文である。陶器瓦のものは面径に大小はあるが、38点中35点が堅三引両文であり、他の3点は牡丹文であった。また、菊丸瓦にも堅三引両文と牡丹文がみられる。堅三引両文と牡丹文は伊達家の家紋として用いられており（逸見・伊達1996）、大年寺を創建し維持していた伊達家の関連を示している可能性が考えられる。

軒平瓦・軒桟瓦は、厚手焼し瓦では中央飾に雪持三枚桙と左右に末端を巻き上げる飛雲唐草文を配するもの1点、中央飾に三枚桙と末端が断切れる飛雲唐草文を配するもの1点、三引両文に隆線唐草文を配するものが1点となる。軒桟瓦では中央飾は欠損するものの、隆線唐草文が配されるものが2点ある。陶器瓦では中央飾に堅三引両文を配し、左右に飛雲唐草文・隆線唐草文を配したものとなる。

現時点では、厚手焼し瓦と陶器瓦の間に新旧関係を見出すことは難しいが、陶器瓦が、炭素を吸着させた焼し瓦と異なり、釉を掛けることによって耐久性を向上させている点に注目する必要がある。

陶器瓦は軒丸瓦・軒平瓦とも主体となる範があり、出土量の大部分を占め、厚手焼し瓦にみられるような複数の型式はみられない。ある一時期の造営に際して一括発注され生産された製品の可能性が考えられる。その生産地については、発注記録等の有無を含め、今後の課題である。

最後に仙台城から出土した瓦に文様の類例を求めておきたい。仙台城二の丸第10地点の発掘調査報告（東北大学理蔵文化財調査研究センター1998）において瓦当部の類型化が行われており、軒平瓦の文様が分類され、中央飾と唐草文の組み合わせで多くのヴァリエーションが示されている。厚手焼し瓦から見ていくと、中央飾が三枚桙に雪を表現した第18図-8は、仙台城二の丸第10地点の太葉雪持桙+唐草2類に、第18図-5は三枚桙1aもしくは1b+唐草1a類に類似する。一方、陶器瓦では、第18図-6・7、第28図-7は三引両+唐草1a類に、第18図-6、第31図-23は三引両+唐草5類にそれぞれ類似している。

なお、瓦を作製した工人に関する記録では、東北地方の諸藩は城郭建築などに備えて藩用瓦の需要を満たすため、盛んに先進地から技術者を招聘しており、仙台藩では14軒の御瓦師がいたとされている（東北歴史資料館1993）。14軒の内の1軒に、元禄以前より藩に仕えていた庄子家があり、庄子家の勇吉という人物が葺替に従事した記録が残されている。記録では、文政8年（1825）「大年寺山門・経蔵屋根替」、同9年（1826）「大年寺仏殿屋根替」、

弘化4年（1847）「大年寺司鼓寮・萬寿寺仏殿葺替」、嘉永2年（1849）「大年寺齐堂葺替」、同3年（1850）「大年寺山門脇廻・禪堂等屋根替」の5回の葺替に従事した記述が確認できる。また、大年寺の葺替だけではなく、仙台城二の丸の葺替にも携わっている。

3. 瓦にみられる刻印について

出土した軒平瓦・丸瓦・平瓦の表面や側面に刻印が施されたものがある。1年次では2種類の文様、2年次は7種類の文様が認められた。1年次と2年次に重複する文様ではなく、確認された刻印はあわせて9種類である。刻印の位置は、軒平瓦では瓦当部、丸瓦では玉縁側の中央辺りに多く、平瓦では小口や両端に押印されている。

文様の詳細は、丸に横（第19図-1）、木瓜形に四つ花弁（第19図-13）（以上1年次）、丸に四つ石（第29図-8）、木瓜もしくは花菱（第29図-10）、丸に八カ（第30図-12）、縱棒に三（第30図-13）、木瓜もしくは花菱の変形（第31図-14）、長方角に一と二重丸（第31図-15）、丸に反り亀甲と丸（第31図-17）、丸に八（第31図-18）である。

瓦の刻印は惣門修復工事に伴う調査報告にも「安三」、「◎」、「化」の3種類が掲載されており、瓦工人の屋号と考えられている。また、仙台城三ノ丸跡（仙台市教育委員会1985）でも、円形、鍵形、平四つ目、屋号、六つ星等が確認されているが、両者とも今回の調査で確認された刻印に類似するものは認められなかった。

仙台市内の既出の資料に類似する刻印は認められなかったが、江戸の仙台藩伊達家上屋敷（東京都港区）の敷地内から出土した瓦に、第29図-10の刻印に類似したものがある（東京都埋蔵文化財センター2003）。

4. 軒丸瓦の「三つ葉葵」について

大年寺は、元禄9年（1696）に伊達家4代藩主伊達綱村が茂ヶ崎の地に銀入れの式をおこない、翌元禄10年に黄檗宗の鐵牛道穂和尚を請うて開山とし、創立されている。以来、明治時代の魔仏毀釈により伊達家の庇護を失うまで菩提寺として存在していた。

黄檗宗は、日本からの度々の招請に応じて隱元隆琦禅師が渡来し、徳川第4代將軍家綱より京都府宇治市に10万坪が与えられ、寛文元年（1661）に黄檗山萬福寺を開いたことに始まる。寛文7年（1667）には諸堂宇の建立に際し、徳川家は白金2万両と建築材を投じ、その創建はさながら幕府の事業として進められたとされている（竹貫1999）。

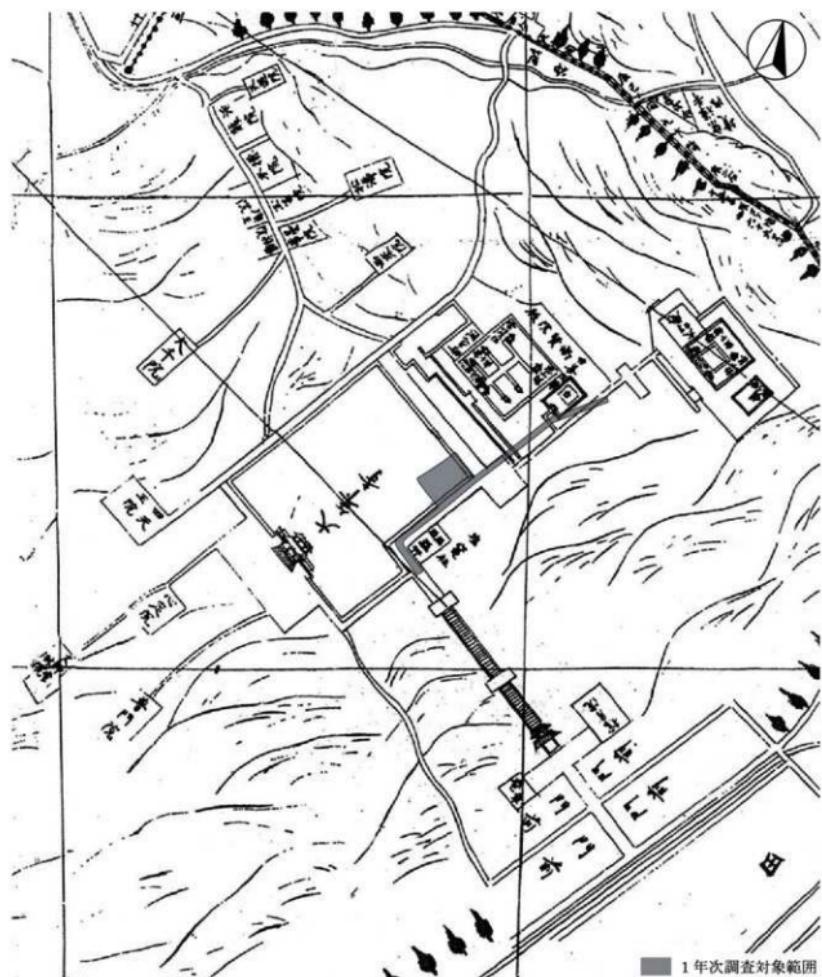
このような経緯から、葵文を用いる寺は徳川氏ゆかりの寺か、本多氏または賀茂神社に関係があるとされ（丹羽1977）、黄檗山萬福寺でも寺紋として使用されている。

仙台市内に現存する黄檗宗寺院は大年寺のほか月耕道穂和尚を開山とする萬壽寺（仙台市青葉区）があり、江戸時代には共に「御一門格」と呼ばれる寺格の最上位に格付けされる、仙台藩にとって重要な寺院であった（仙台市史編さん委員会2003）。現在、萬壽寺の本堂の棟には堅三引両文と葵文の瓦当が配されていることから、同じ黄檗宗である大年寺にも寺紋である三つ葉葵の軒丸瓦が軒先に掲げられていたと推測される。

5. 遺構・遺物と大年寺の関係について

表2をみると、瓦は7トレンチ付近に厚手焼し瓦が、それとやや離れた2・3トレンチ付近に陶器瓦が集中している。分布の偏りは、本地に営まれた瓦葺の建築物の位置や内容を反映するものとみられる。

当時の大年寺の様子を知る手掛かりとして、享保19年（1734年）の「両足山志」（仙台市博物館1993）や、「所々寺院御絵図」・「安政補正改革仙府絵図」などがある。第33図は、安政期の大年寺の敷地や院の配置がかなり詳細に描かれている「安政補正改革仙府絵図」（以下「安政絵図」とする）に、現在も残存する土塁等を基準として、今回の調査対象範囲を重ねた図である。7トレンチが位置する現在の道路の西半部は、「安政絵図」で土塁に閉まれ、



第33図 安政補正改革仙府絵図(1/5,000)

仏殿や方丈、鐘楼堂、斎堂、憲堂などの諸堂が配された大年寺の中心伽藍の南に接する道に重なり、2トレンチが位置する東半部は「尚賢院殿」等と記された伊達家の墓所を一部通過することとなる。調査対象範囲の大半が道となっていたことからすれば、今回の調査で遺構密度が希薄であったこともうなづける。

7トレンチの位置は、大年寺の伽藍を区画する土壠と、区画外側に道を隔てて配された領守社である「塩竈神社」の間にあたる。7トレンチから主体的に出土する焼し瓦が惣門の調査で出土した各種の瓦と共通する文様をもつことから、厚手焼し瓦は大年寺の伽藍を構成する諸堂宇の造営ないし修繕に伴って使用され、また廃棄されたものと考えられる。

惣門は、明治37年8月の暴風雨によって倒壊し、翌38年4月に再建されている『東桑法窟再建記』。修理後の写真では堅三引両文の軒丸瓦を用いた本瓦葺であるが、その後、大正14年11月に屋根の修復・葺き替えを中心とした修繕が行われ、昭和60年の解体修理までは桟瓦葺であったことが確認されている（仙台市教育委員会1987）。従って惣門の調査時に出土した厚手焼し瓦は、明治期もしくはそれ以前のものである。今回の調査によつて出土した瓦には堅三引両文軒丸瓦のほかに九曜文軒丸瓦もみられ、また軒平瓦の文様にも複数の型式が認められることから、明治期までの間に複数の堂宇の造営・補修などに伴つて用いられた瓦であったと考えられる。

一方、陶器瓦は、中心的に出土する2トレンチが伽藍東側に位置する墓所区画付近にあたることから、伊達家の墓所を区画する塀や門などの屋根に葺かれたものと推定される。

調査対象地のうち土塁で囲まれた駐車場部分は大年寺の伽藍地内に入るが、工事計画では掘削が表土途中までであり、それよりも下位の調査を実施していないことから、関連する明確な遺構は確認されなかつた。「所々寺院御絵図」に示された大年寺の伽藍によれば、絵図が描かれた時期には建物のない空閑地となっていたようである。

大年寺は、仙台藩の寺院の中でも第一級の「御一門格」の寺格を与えられた公的な寺院であるが、明治の廃仏毀釈によって衰退し、現在は修理が行われた惣門と土塁を残すのみとなつてゐる。先に挙げた絵図等から往時の様子をある程度知ることはできるものの、詳細な伽藍配置や土地利用等については不明な点が多い。今回の調査では僅かな手掛かりしか得られなかつたが、今後、考古学的なアプローチによって新たな知見が得られるものと考えられる。

引用・参考文献

- 梅津幸次郎 1936年『築城上より見たる大年寺』『宮城教育』
- 江戸遺跡研究会 2001年『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 大月義徳 2001年「5. 仙台市青葉山遺跡E地点に認められる埋没引張亀裂群について」『東北大学埋蔵文化財調査年報』15
- 琳ハドソン・東洋鉄造貨幣研究所編 1998年『新寛永通宝図鑑』
- 菅野正道 1997年「名取郡北目城主栗野氏の盛衰（上）」『仙臺郷土研究』通巻第255号
- 菅野正道 1999年「名取郡北目城主栗野氏の盛衰（中）」『仙臺郷土研究』通巻第258号
- 菅野正道 1999年「名取郡北目城主栗野氏の盛衰（下）」『仙臺郷土研究』通巻第259号
- 財團法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1995年『宗玄寺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集
- 九州近世陶磁学会 2006年『第16回九州近世陶磁学会資料 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』（九州編）
- 仙台市史編さん委員会 1994年「2 地形と地質」『仙台市史 特別編1 自然』
- 仙台市史編さん委員会 2002年「第三節 館をめぐる生活」『仙台市史 通史編2 古代中世』
- 仙台市史編さん委員会 2003年「第四節 寺社と門前」『仙台市史 通史編4 近世2』
- 仙台市史編さん委員会 2004年『仙台市史 通史編5 近世3』
- 仙台市史編さん委員会 2005年『仙台市史 特別編2 考古資料』
- 仙台市史編さん委員会 2005年「四 旧石器時代研究と仙台」『仙台市史 原始 通史編1 旧石器時代〔改訂版〕』
- 仙台市史編さん委員会 2006年「第一部 市内の中世城館」『仙台市史 特別編7 城館』
- 仙台市教育委員会 1985年「第6節 瓦」『仙台三ノ丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集
- 仙台市教育委員会 1986年「新妻家墓地改葬調査報告」『年報』7 昭和60年度 仙台市文化財調査報告書第94集
- 仙台市教育委員会 1987年『仙台市指定有形文化財 大年寺惣門解体修復工事報告書』
- 仙台市教育委員会 1989年『茂ヶ崎横穴墓群一発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第130集

- 仙台市教育委員会 1996年『仙台市の文化財』
- 仙台市教育委員会 2005年「Ⅱ 出土遺物 4. 瓦」『仙台城本丸跡1次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第3分冊出土遺物編』仙台市文化財調査報告書第282集
- 仙台市教育委員会 2008年「X II 茂ヶ崎城跡発掘調査報告』『南小泉遺跡他発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第326集
- 仙台市博物館 1993年『特別展 武家と禅－伊達氏とみちのくの禪宗寺院－』
- 早田 鮎 1996年「新しく発見された單成火山－宮城県安達火山－」『第四紀路頭集－日本のテフラ－日本第四紀学会
- 高倉淳ほか編 1994年「安政補正改革仙府絵図』『絵図・地図で見る仙台 第一輯』今野印刷株式会社
- 竹貫元勝 1999年「黄檗宗教団の形成と展開』『叢書 禅と日本文化 10 禅とその歴史』ペリカン社
- 坪井利弘 1976年『日本の瓦屋根』理工学社
- 東北大埋蔵文化財調査研究センター 1998年「5. 仙台城の瓦とその変遷」『東北大埋蔵文化財調査年報』9
- 東京都埋蔵文化財センター 2003年「挿図・表・写真 瓦』『汐留遺跡III－旧汐留貨物駅跡地内の調査－第3分冊』
- 東京都埋蔵文化財センター第125集
- 東北歴史資料館 1993年「2. 藩政期の瓦生産」『宮城県の瓦職』東北歴史資料館資料集34
- 中川久夫 1990年「仙台城址およびその周辺地域の地質」『仙台城址の自然』
- 日本の地質『東北地方』編集委員会編 1989年「第5章 新第三系・第四系 5.5 仙台地域」
『日本の地質2 東北地方』共立出版株式会社
- 丹羽基二 1977年「紋の三 個性に富んだ紋 菓紋』『寺紋』秋田書店
- 東中川忠美 2001年「陶器の編年 4. 壺・甕」『九州陶磁の編年』九州陶磁資料館
- 逸見英夫・伊達泰宗 1996年「伊達家の家紋（四）」『独眼竜政宗の素顔』宝文堂
- 宮城県教育委員会 1990年『大年寺横穴群』宮城県文化財調査報告書第136集

写真図版



遺跡遠景（東から）



1 トレンチ全景（北東から）



1 トレンチSD 1 完掘状況（北東から）



1 トレンチSK 1 完掘状況（北西から）



2 トレンチ全景（北東から）



2 トレンチSK 2 葬棺出土状況（北西から）



葬棺内人骨出土状況（北西から）



葬棺内人骨取り上げ（北西から）

写真図版 2 (1 年次調査)



2 トレンチSK 2 完掘状況（北西から）



3 トレンチ全景（北東から）



3 トレンチ中央下層調査断面（北西から）



4 トレンチ全景（北東から）



5 トレンチ全景（北東から）



5 トレンチP 1 完掘状況（南東から）



5 トレンチP 2 完掘状況（北西から）



6 トレンチ全景（南西から）

写真図版 3 (1 年次調査)



7 テレンチ全景 (北東から)



7 テレンチ南側下層調査断面 (北東から)



7 テレンチ南側下層調査礫層検出状況 (北東から)



8 テレンチ全景 (南東から)



8 テレンチ南側下層調査断面 (北西から)



9 テレンチ全景 (南東から)



10 テレンチ全景 (南東から)



10 テレンチ北西側サブテレンチ全景 (南東から)

写真図版 4 (1 年次調査)



10 トレンチSK3検出状況（南西から）



11 トレンチ全景（南東から）



調査区遠景（北西から）



土壘遠景（西から）



調査区と土壘の位置関係（北東から）



大年寺惣門（南東から）



教育委員会視察風景（北西から）



4 トレンチ作業風景（北東から）



口縁部



壺内部當て具痕



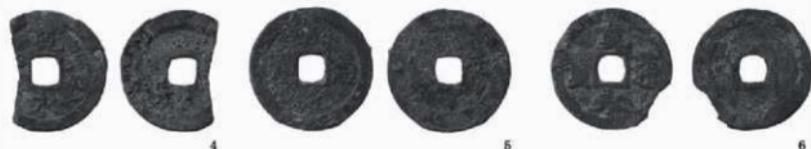
小形木製品

1



2

3

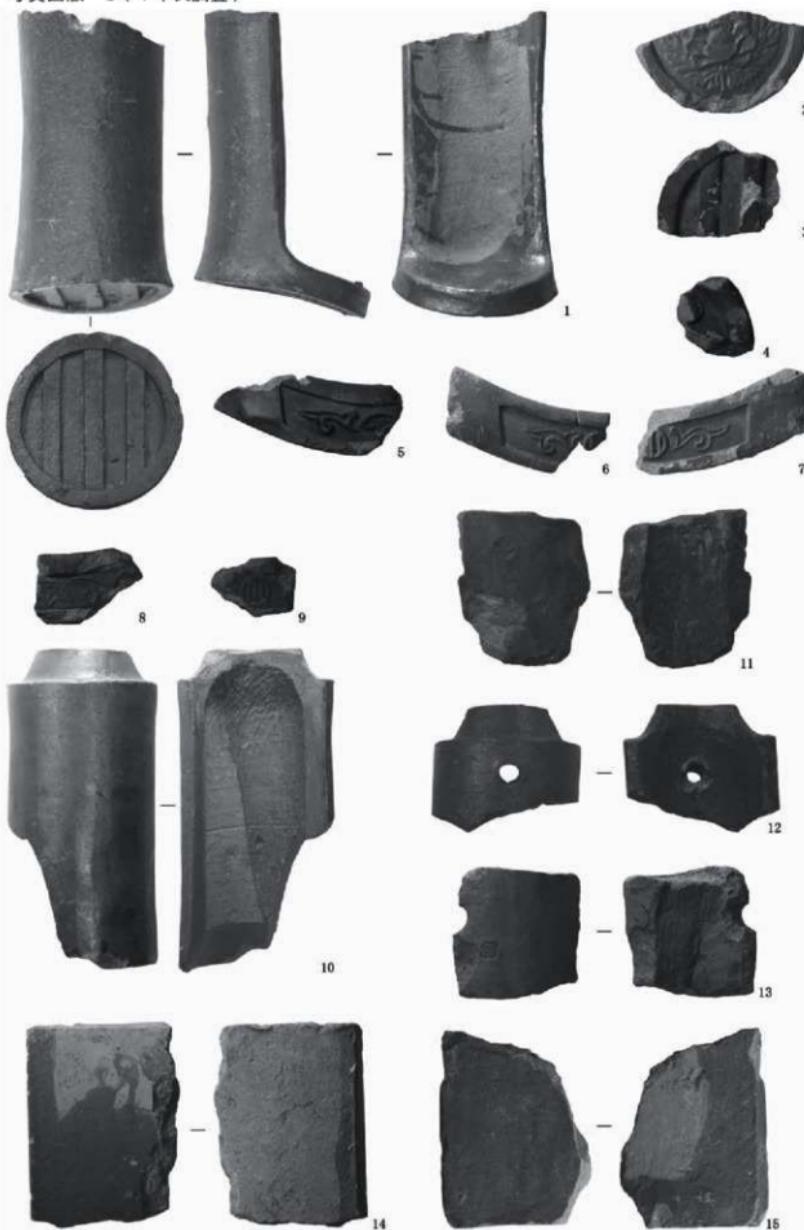


4

5

6

写真図版 6 (1年次調査)





写真図版 8 (1 年次調査)



26



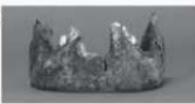
頸蓋骨
上面
前面 | 側面



下顎骨上面



下顎骨前面



膝蓋骨
表・裏



尺骨

上腕骨

尺骨 桡骨



腓骨

胫骨

大腿骨

脛骨 腓骨

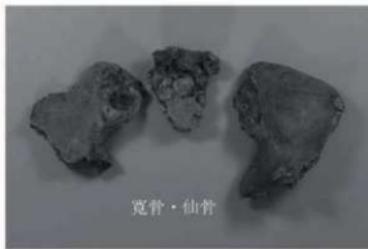


鎖骨

肩甲骨

腰椎

肋骨



寛骨・仙骨



台地北東側立会い調査（北西から）



送信所裏立会い調査（北西から）



1 レンチ南側完掘状況（北西から）



1 レンチ北側完掘状況（南東から）



1 レンチ南西側断面（部分）（北東から）



2-1 レンチ完掘状況（東から）



2-1 レンチ完掘状況（北西から）



2-1 レンチ深掘 1 西側断面（東から）

写真図版 10(2 年次調査)



2-1 トレンチ深掘3西側断面（東から）



2-2 トレンチ完掘状況（南東から）



2-3 トレンチ・SD 1完掘状況（北から）



2-3 トレンチSD 1断面（北から）



2-4 トレンチ完掘状況（北から）



2-4 東側トレンチ南側断面（北から）



2-5 トレンチ完掘状況（北西から）



2-5 西側トレンチ南側断面（北から）



2-6 トレンチ遺物出土状況（北から）



2-6 トレンチ深掘（西から）



3-1 トレンチ東側完掘状況（北東から）



3-1 トレンチ西側完掘状況（北東から）



3-2 トレンチ完掘状況（南から）



3-2 トレンチSD2完掘状況（東から）

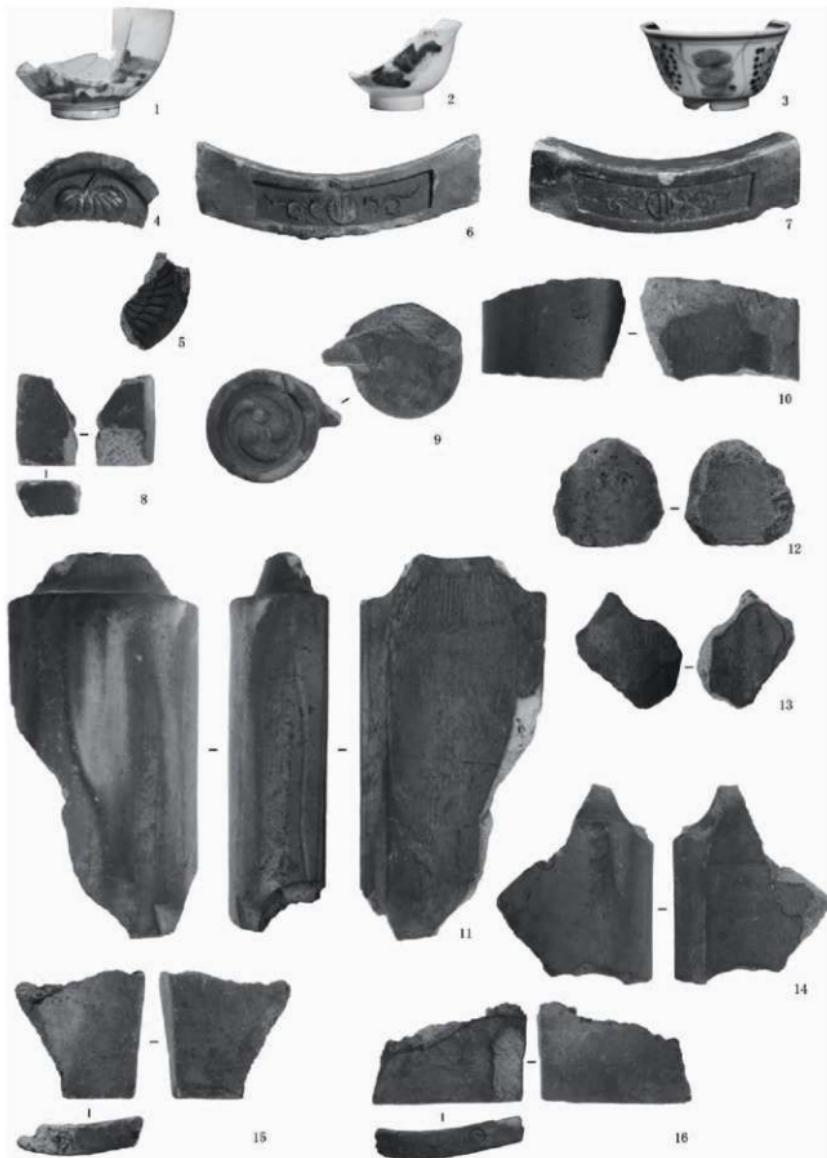


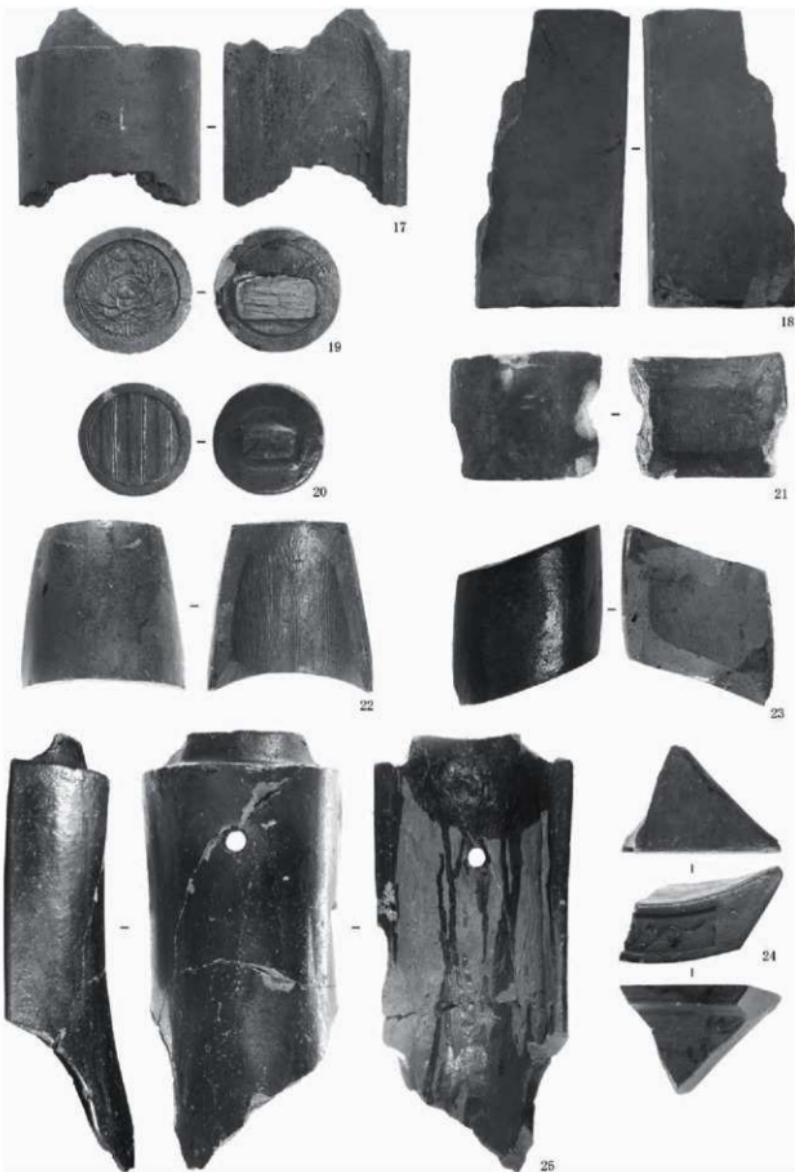
4-1 トレンチ完掘状況（南西から）



4-2 トレンチ完掘状況（南西から）

写真図版 12(2年次調査)





報告書抄録

ふりがな	もがさきじょうあとーだい2じちょうさほうくしょー							
書名	茂ヶ崎城跡－第2次調査報告書－							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第336集							
編著者名	荒井 格 大久保弥生 藤木 海 宇井義典 大川康裕							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL 022-214-8894							
発行年月日	2009年1月30日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市区町村	遺跡番号					
茂ヶ崎城跡	宮城県仙台市 太白区茂ヶ崎 一丁目地内	04100	宮城県 01119	38° 14' 21"	140° 52' 34"	2008.11.6 ~ 2009.7.2 ~ 2009.9.5	310m ² 209m ²	大年寺山公園 整備事業に伴 う発掘調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城館跡 寺 跡	中世 近世	甕棺墓 土坑 ピット 溝跡		繩文土器 瓦 近世陶磁器 唐津産大甕 貨銭 数珠玉 小形木製品		近世の甕棺墓1基検出 葵文の瓦当面出土		

仙台市文化財調査報告書第336集

茂ヶ崎城跡 — 第2次発掘調査報告書 —

2009年 1月

発 行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課 022(214)8894

印 刷 株式会社共同印刷所
東京都府中市寿町3-13-8
TEL 042(368)2001
